町民参加の町史づくり

竹富町史だより

第52号
2023年８月20日

竹富町教育委員会
沖縄県石垣市美崎町11－１
TEL（０９８０）８７－６２５７

目　次

〈特集〉斜里町との交流史
1、姉妹町盟約にいたる潮流……1
2、瀬戸　弘氏の手記から……3
3、世界自然遺産の登録……10

大自然しれとこ……（宜間正八）…12
—自然・文化・人との出会い—

斜里町との漁業の交流……（波照間純一）…24

斜里町・竹富町親善交流年表……26

離御嶽……（通事孝作）…32

波上坑探究記……（安里　淳）…33

〈資料紹介〉大原公民館会務表　1962年度……44

〈増田昭子ノート〉黒島の「衣」……（増田昭子）…50

屋号について二題……（西前津松市）…55

護郷隊について　—竹富島を中心に—……59

2022年度竹富町史編集係購入資料一覧……60

編集後記……61

〈表紙の写真〉
姉妹町盟約を締結し、握手をする瀬戸弘竹富町長（右）と藤谷豊斜里町長（左）。1973年（昭和48）1月10日、場所は東京・日本都市センター。斜里町立知床博物館による写真提供。

〈特集〉斜里町との交流史

―斜里町と姉妹町盟約から50年の節目によせて―

2023年（令和５）は、竹富町にとって、町制施行75年の節目にあたる。そしてもう一つ、北海道知床半島に位置する斜里町と日本最南端の竹富町が、1973年（昭和48）に姉妹町の盟約を結んで50年という記念すべき年でもある。

斜里町・竹富町は、1973年に交わされた盟約書の趣旨に沿いながら、お互い距離にして約3000㎞という遠隔の地にあることもものともせず、姉妹町としての親善交流を深めてきた。その半世紀にわたる交流には尊いものがある。

デジタル時代の到来により、両町の距離的な制約も難なく乗り越える、そんな局面も今後みられることだろう。そして、一層の親交が期待できるのである。ここで両町の交流史を確かめながら、明るい未来を展望することは、盟約50年の節目にして大きな意味があることだろう。

１．姉妹町盟約にいたる潮流
―自然が結んだネットワーク―

竹富町と斜里町は、日本列島の南北端に位置し、対照的な自然環境でありながら、ともに原生的で豊かな特色のある国立公園を擁する自治体としても注目されている。それは近年の自然保護に対する社会的な関心の高まりとも重なるものである。

オホーツク海と斜里岳は斜里町を象徴する景観であろう。斜里町歌《斜里まちの歌》は、「流氷寄せくるオホーツクに」とうたいだし、２番では「知床の父　斜里岳の／ふもとに広がるよく野あり／海さち豊かな浜べには／はまなすの花　咲き乱れ」と、斜里町の自然景勝を誇り高くうたっている。ちなみに、「はまなす」は斜里町の町花であり、有名な《知床旅情》の冒頭では「知床の岬に　はまなすの咲くころ…」とうたわれ、知床をイメージさせるワンポイントになっている＊１。

竹富町は、個性的な島々からなり、各島をとりかこむサンゴ礁の海、西表島の原生的な亜熱帯性照葉樹林と河口に広がるマングローブ林、それらが特色ある景観を形成している。また、西表島はイリオモテヤマネコの生息地としても広く知られている。

斜里町は1964年（昭和39）に知床国立公園が指定されている。1972年（同47）の西表国立公園指定については、その前段を説明する必要があるだろう。

アジア・太平洋戦争後、アメリカ合衆国の統治下にあった沖縄の施政権が本土に復帰したのは1972年５月15日－。そのおよそ１カ月前、４月18日に琉球政府によって「西表政府立公園」として指定された。そして４月28日に「沖縄の復帰に伴う環境庁関係法令の適用特別措置に関する政令」が公布され、「西表政府立公園」は国立公園として引き継がれることになったのである。このように西表国立公園の指定は時代背景と大きく関わっているのである（公園区域の拡大や、世界遺産登録については後で触れる）。

ところで内田暁友氏は、午来昌氏の証言や、藤谷豊氏の著書『岐路あり　友あり』の記述を論拠として、斜里町・竹富町の姉妹町の発案者を推察している＊２。それは当時、自然保護活動に熱心であった高桑華夷治氏（当時、斜里町議会議員）とするものである。

すなわち、沖縄復帰と同時に西表国立公園が指定されることを見込み、高桑氏は国立公園や自然保護を軸とした竹富町との交流を思い描き、そのアイデアをさまざまな場で披歴してきたことで、姉妹町実現の端緒を開いたというのである。

1972年12月の斜里町議会で、竹富町との姉妹町盟約が議決したことを考えると、短期間のうちに実現に向けて動いたことは間違いないだろう。1972年11月に、国内の市町村に前例のない「斜里町自然保護条例」を制定したこととも連動していたにちがいない＊3。

はたして、その背景にはどのようなネットワークがあり、いかなる人物が、どんな役割を果たしたのだろうか―。

そのカギを握る一人に、姉妹町の盟約締結した当時の竹富町長・瀬戸弘氏（1918年生）がいる。氏は1968年（同43）から日本復帰をはさんで1980年（同55）まで３期12年、町政が大きく転換した時代に、第８、９、10代の竹富町長を務めた人物である。

竹富町教育委員会（町史編集係）は、瀬戸弘氏の蔵書や収集資料の一部を、瀬戸家からの寄贈資料として収蔵している。そのなかに１冊のアルバムがある。これは1973年７月、盟約締結後に竹富町の親善訪問団が初めて斜里町を訪問したときの写真がアルバムになったもので、背表紙には「贈呈町長殿　姉妹町斜里町」と手書きで記されている。つまり、斜里町から瀬戸氏へ「友好の証」として贈られたアルバムなのである。

また、瀬戸弘氏の著書『竹富町の島々と共に』(私家本、1982年）には、「日本最東北端の斜里町と姉妹町盟約」と題した回顧録が収められている(304－307頁)。本稿では、このほぼ全文をテキストとして引用し、関連する諸資料で補完しながら、姉妹町盟約にいたる潮流を浮かび上がらせることを目的とする。

〈写真１〉瀬戸 弘氏(撮影･提供/石垣佳彦)

そのとき、もっとも参考にしたいのが、『自然と歴史が結んだ絆―竹富町・弘前市と斜里町との交流の歴史―』(斜里町立知床博物館、2014年)である。ここに収録された「竹富町と斜里町の交流のはじまり」(以下、「交流のはじまり」と略記)には、盟約の実現に尽くした人々が生き生きと描かれ興味をそそられる。

とりわけ、高桑華夷治氏（1919年生)、藤谷豊氏（1913年生)、秋山智弘（1934年生氏)、澤田栄介氏（1933年生）は、姉妹町締結のキーパーソンと目され立項されている。例えば、秋山氏は次のごとくである。

「藤谷さん（当時の斜里町長、筆者注）が竹富町との交流について相談を持ちかけたのは学習研究社（現在は学研ホールディングス）の映画局（以下、学研映画と略）で記録映画を制作していた秋山智弘さん（1934－、昭和９－）でした。秋山さんは知床が国立公園に指定される前年、1963（昭和38）年に「日本の国立公園－北海道の自然」制作のため、監督の一人として知床に滞在しました。藤谷さんとはその時に知り合って以来、上京のたびに銀座で盃を傾けながら語り合う親しい間柄でした。〈中略〉竹富町との交流について藤谷さんが秋山さんに相談を持ちかけたとき、秋山さんはプロデューサー

として「海と太陽の島－おきなわ」を制作するために復帰前の沖縄に滞在した後で、ちょうど現地の様子をよく知っていました。藤谷さんの相談にのりながら、秋山さんは竹富町と斜里町をつなぐことができる人物は澤田栄介さん（1933－、昭和８－）しかいないと考えます。」

上の秋山氏の紹介から、西表島国立公園の指定、姉妹町の盟約締結といった流れへの合意形成は、もう芽生えていたことがうかがえる。このような盟約前史ともいえる潮流は、すでに水面下で動きだしていたのである。

２．瀬戸弘氏の手記から
―「日本最東北端の斜里町と姉妹町盟約」－

⑴澤田栄介氏の西表赴任

瀬戸弘氏の手記「日本最東北端の斜里町と姉妹町盟約」を引用・紹介しながら、盟約実現の具体的な経緯や瀬戸氏の思いを追求していきたい。冒頭は西表国立公園が指定され、その管理事務局所長に澤田栄介氏が赴任してくることから始まる。なお、瀬戸氏の手記からの引用文は太字で表わし、文末に〈瀬戸〉と付記することにする。

> 琉球政府立西表公園が、昭和四十七年日本復帰と同時に国立公園となった。それに伴い、政府は石垣市に琉球政府立西表公園が管理事務所を設置し、その初代所長には沢田栄介氏が任命され赴任した。
>
> 同氏は三重県の出身で、以前北海道の阿寒国立公園に勤務した経験をもち、近くの知床国立公園も十分知り尽くし、公園行政に造詣の深い方であった。〈瀬戸〉

1972年（昭和47）に沖縄の本土復帰により、おのずと西表国立公園が指定された。その管理事務所の初代所長に就任したのが澤田栄介氏である＊４。瀬戸氏は彼を「公園行政に造詣の深い方」と紹介するが、その事情を知ると納得がいく。

それもそのはず澤田氏は1968年（同43）から1971年（同46）まで、弟子屈町川湯の阿寒国立公園管理員（現在の環境省自然保護管、すなわち「レンジャー」）を務め、そのうち1969年（同44）からの２年は、羅臼町の羅臼管理員事務所を兼務しているのである。つまり、知床半島全域の管理を担当したことになるのである。澤田氏はこの知床兼務時期に、知床の大自然に親しみ、先述の秋山智弘氏や、斜里町の人々との交流を深めたのだという。

1971年（同46）８月、澤田氏は環境省から総理府（現在、内閣府）へ出向となり、東京勤めが始まった。それ以降も秋山氏との交流が続いている。折しも、秋山氏は記録映画「海と太陽の島―おきなわ」の制作のため、復帰前の沖縄に通っていたので、澤田氏に会うごとに八重山の自然や文化を熱心に伝えていたのである。

1971年といえば、八重山では長期干ばつに加え、大型台風28号「ベス」が襲来し、農民は壊滅的な打撃を受けた。このとき農地を手放す農家が増えて大きな社会問題となっていた。

そんな影響もあったのだろうか。当初、管理事務所所長のなり手がなかなか決まらなかったとのこと。それを聞いた秋山氏は、澤田氏にしきりに西表行きを仕向けたようである。そして、ついには人事担当者に澤田氏みずからアピールし、満を持しての西表赴任とあいなったわけである。

1972年５月、沖縄が本土に復帰した。斜里町では、その年の６月定例町議会をひかえたころ、議会議員の午来昌氏は、高桑華夷治氏の竹富町との交流構想を進めるべく、当時の斜里町長・藤谷豊氏を訪ねて姉妹町締結を提案している。また午来氏は、秋山氏から澤田氏の西表赴任の知らせを受け、６月定例議会が終わるのを待って、藤谷町長と２人で上京しているのである。そこで澤田氏と秋山氏を訪ね、竹富町との交流について話し合いを持ったとのことである。

1972年７月１日、澤田氏は総理府から環境庁に出向となり、そして６日に初代の西表国立公園管理事務所長として、竹富町役場のある石垣市に到着する。ところが、まだ事務所も住宅も決まっておらず、ひとまず竹富町の公衆衛生看護婦詰所に間借りしながら仕事を始めることになったそうである。

⑵斜里町と竹富町

復帰して間もない同年七月中旬頃、他の用事も兼ねて役場に来訪された時、出た話が姉妹町のことであった。

その相手は北海道東北端に位置し、知床国立公園のある斜里町ということである。又この斜理町は、北海道の知床半島のオホーツク海に面した遠隔な位置に所在し、且つ、人口規模は本町の四・五倍にも相当し、農水産業を中心にした町であること等を聞かされた。

離島という地域社会にもかかわらず、この八重山は種々の会合が多く、従って沢田所長との接触する機会も多く、これ等の会合を通して同所長の姉妹町に対する積極的な姿勢、斜里町について多くのことが認識できた。〈瀬戸〉

瀬戸氏によると、1972年（昭和47）７月の中旬、竹富町役場に澤田氏の訪問があった。そのとき斜里町と竹富町の交流、姉妹町の締結についての構想などを、当時の竹富町長・瀬戸弘氏に打ち明けたようである。

２人はその後もさまざまな会合で同席したが、そのたびに瀬戸氏は姉妹町締結に対する澤田氏の熱い思いを聞かされたことだろう。瀬戸氏が「初めて耳にするこの様な沢田同所長の提案を受けて、今後十分検討することにし、後日話合う機会をつくることにした」というように、この時期に盟約締結への意欲がかきたてられたようだ。そして、「両町には共通点の多いことがわかった」と、斜里町への理解を深めていったのである。

その共通点とは、先ず地理的に両町が日本列島の両端にある。そして農業面では斜里町の天菜糖に対し竹富町の砂糖キビ、野鳥では、知床のオジロワシ、竹富町のカンムリワシと世紀の貴重な動物であるイリオモテヤマネコが同じく天然記念物として生息している。又、原生的な自然を持つ国立公園を有している等共鳴せざるを得ないものがあった。〈瀬戸〉

ある事柄の比較を通じて、その共通点と相違点をあぶりだすことは、お互いを知るための方法とし

て有効である。

瀬戸氏もいうように、斜里町と竹富町はまるで異なる自然風土であるが、国内で生産される砂糖は、そのほとんどは北海道の畑作物であるてんさい（ビート）と、南西諸島のサトウキビからできているもので占められていることが注目できる。そしてこれらは、当該地方の農業と経済を支える重要な作物であることが理解できる。

また、猛禽類のワシに注目すると、斜里町にはオジロワシが町鳥になるほどで、西表島ではカンムリワシが飛雄する姿がみられる。そのどちらもが国の天然記念物であるという共通点が見いだせる。

国立公園に対しても、このような比較の視点が作用したことだろう。国立公園指定の先進地である斜里町のあり方は、瀬戸氏の心に大きく響いたにちがいない。また、両者に共通する課題を抱えていることにも気づいたはずである。そして次のように述べている。

> 特に日本の環境行政に多くの問題を残している現状からして、両国立公園の自然を保全する主旨から、姉妹町締結は行政の任にあるものの当然の責任であると痛感した。
>
> 北海道の先進地から受ける多くの刺激は、倍にも増して本町の繁栄に寄与するところ大なることを痛感し、且つ、その自信を深めた。そのため町会議員を始め各島の区長及び公民館幹部に、姉妹町締結の方向で一応打診することにした。〈瀬戸〉

斜里町は1964年（昭和39）に知床国立公園に指定されており、竹富町にとっては自然保護活動の先進地だといえる。その刺激をもっとも受けたのは瀬戸氏自身だったのではないか。地域の自然の特性を守り育てる取り組みは、「行政の任にあるものの当然の責任」との認識を強く抱くようになっていったのである。そこには姉妹町の締結に向けた決意のほどがうかがえるのである。

⑶盟約締結へのハードル

瀬戸氏は、斜里町との姉妹町の締結について、ひとまず町内各公民館に打診してみた。しかし、米国統治下にあった当時の沖縄に、姉妹町の事例はわずかで、思うように見通しを立てることができなかったようである。次のテキストからは瀬戸氏の苦悩を読みとることができる。

> 県内における当時の姉妹町村の締結状況は、僅か五ヶ町村に過ぎず、多くの町村は未締結の状況にあった。このことは当然うなづけたことであった。即ち、長期間にわたる米国の統治下にあったため当然の制約によるものと思われた。〈瀬戸〉

アジア・太平洋戦争後、沖縄の本土復帰までの時期は、アメリカ統治下の占領期であると同時に、復興期という見方もできるだろう。この時期、八重山ではマラリアの蔓延、深刻な食糧不足、治安の混乱もみられたが、同時に開拓移民政策、マラリア撲滅政策など、生活基盤の整備に進展がみられたからである。

石垣島では、各方面の整備開発が、米国民政府の支援により着々と進められていた。特に道路の整備が進められたが、当時の道路名をみてみると、マクラム道路（轟川－伊原間）、リースン道路（川

原)、オグデン道路（川平）など、当時の軍政官の名前を冠したものが多い。また、1955（昭和30）年11月には石垣島一周道路が完成し、石垣島の交通事情の発達による環境の変化にはめざましいものがあった。

一方、西表島では、戦後の開拓移民により新しい集落が誕生し、これらの多くは東部地区に創設されたが、祖納、干立などの伝統的な集落のある西部地区との往来には困難をきたした。1977年(同52)に北岸道路が開通するまで、島の東西を結ぶ陸路はないという状況だったのである。

また、日米両政府による「西表総合開発構想」にも大きな期待が寄せられたが、本土復帰のころにはすでに構想倒れに終わっていた。そのような時代背景のなかで、斜里町との姉妹町締結を疑問視する声も聞かれた。

> 姉妹町締結を進めるうちに一部の住民から異論がでた。それは西表住民の生活上からでた道路の問題でした。その言い分は「西表島は戦前戦後を通して十数回に上る開発調査を実地しているが、いまだに東西地区を結ぶ一本の道路もなく、孤島同様の状態である。しかも折角、陳情して着工を見た横断道路も、政府は復帰と共に中止している状況で、姉妹町の締結は両国立公園の自然保護を強調するあまり、更に、西表島を未開発の方向へと追い込みはしないか」とした疑問点であった。
>
> 当時西表の横断道路は全工程二十五キロメートルの内十二キロメートルが完成し、残りが十三キロメートルという状態にあったが、自然破壊につながるとして中止したいきさつがある。このため地元民のこのような意見の出るのは当然だとして同情せざるを得ないものがあった。〈瀬戸〉

西表島には「自然と開発との相克」＊5がいつも課題として横たわっている。当時、竹富町議会や住民のあいだで、西表島横断道路の進捗や復帰記念事業のあり方が随分議論されたようである。そして北岸道路の開通は、西表住民による「工事促進大会」の開催、沖縄県、および県議会、総合事務局への陳情などを経て実現にいたった経緯がある。

また、1973年（同48）５月の斜里町議会で、遅々として進まない北岸道路の整備促進を関係機関に要請することが議決されたことも見逃せない。瀬戸氏は著書『竹富町の島々と共に』では、「西表島北岸道路開通」の項目を立て、「姉妹町の北海道斜里町においても、西表開発のブレーキとなっているとして、開通を熱望する現地住民にこたえて、該道路の早期実現をとり挙げ、同町議会で全会一致を以て決議し、北海道開発庁を通じて沖縄開発庁に要請し、その促進に努めるという連体的な行動もあった」と記している。実際に斜里町長、および議会議長の連名で、要請書を建設省や沖縄開発庁などの関係者36名に送付していることもここに記しておきたい＊6。

> 沢田所長は斜里町長から連絡があったとして、遂一同町長の意向を熱心に伝えてきた。前述したように、一部に異論はあったものの、町議会及び教育委員会には、自然環境を活用し地域社会の振興を図る主旨から、積極的に賛同してもらった。そのため姉妹町問題は急速に解決の方向へと進んだ。〈瀬戸〉

また、竹富町議会、竹富町教育委員会といった関係機関と、斜里町との姉妹町盟約が「自然環境を

活用し地域社会の振興」を目的とするという合意形成が速やかに図られ、姉妹町締結に向けて本格的に動きだした背景がある。こうして避けて通れないハードルを越えることができたのである。

⑷姉妹町締結へのカウントダウン　―1972年下半期－

1972年９月８日、瀬戸弘氏は竹富町長選挙に当選し、第９代町長として就任した。そして、斜里町との姉妹町締結への取り組みに拍車がかかった。９月26日の消印が押された斜里町長・藤谷豊氏宛の書簡が「交流のはじまり」（８頁）に収録されている。差出人は澤田栄介氏。全文は次のとおり。

「早速でございますが、姉妹町の件につきまして報告申し上げます。今月８日の選挙で前瀬戸町長が引き続いて町政を担当することになりまして、今度は本件に関して、積極的に取り組みたいとの意気込みでございます。又、屋良町議会議長が責任を持って取りすすめたいとの申出もあり、必ず了解が得られるものと思います。一応、11月９日全国町村議会議長会議が開催されます折を、両町の話合いの場と致したいとの希望で、その後、貴町を訪問することなど考えております。」

連絡係を請け負った澤田氏と藤谷氏とのやりとりは、ほかにも相当数あったように思われる。また、後述する初会合に備え、両町の観光パンフレットや、地形図なども収集して両町長に送付したそうである。このことは、澤田氏が両町長のあいだに立って、それぞれの意向を伝達する重要な役割を担っていたことを物語るものである。

> 斜里町との連絡は、総じて沢田所長に面倒を見てもらうようお願いした。竹富町の諸状況の報告を受けた斜里町から、「全国町村大会が十二月東京で開催される。その機会に両町から町長と議長が出席して、姉妹町締結に対する具体的な準備の打合わせをしたい」いうことである。既に斜里町では、藤谷町長と赤木議長が、出席することになっているということである。
>
> それを受けて同月、屋良議長と共に東京に出発した。斜里町では、既に学研の秋山智弘氏　外二、三名の方が、藤谷町長と共に銀座第一ホテルの一室に待機しておられた。
>
> 初めて接する藤谷町長の姉妹町にかける熱意に感激せざるを得なかった。そして、両町のもつ独特的な問題が、遠慮なしに話し合われ、最後に藤谷町長からご厚意の酒肴が出され、姉妹町の予備交渉ともいえる基本的な合意がとりつけられた。〈瀬戸〉

澤田氏は「沖縄の人々は物の決定までには、相当時間をかける方なので、仲々オイソレとはゆかぬ」と藤谷氏への私信をしたためたようだが、とにかく斜里町は機をみるに敏である。姉妹町締結への具体的な準備、打ちあわせのために初会合を「全国町村議会議長大会」に合わせて持ちたいと、斜里町からの働きかけがあり、締結への勢いが増した。

また、1972年10月16日付の『北海道新聞』で、「日本列島駆ける「姉妹の縁」斜里（知床国立公園）と竹富（沖縄・西表国立公園）来月両町長が期待の「詰め」」の見出しで大きく報道されたことも、カウントダウンの契機になったのではないだろうか。

初会合の内容や、これ以降の具体的な経緯は『自然と歴史が結んだ絆』を頼るしかない。これに沿

いながら経過を追っていこう。

10月25日、斜里町で姉妹町盟約書の起草が行なわれた。当時、日本国内の自治体同士による姉妹町盟約の類例は少なく、盟約書の起草を担当した斜里町企画調整室主事・藤枝博氏（1941生れ）は、旭川市（北海道）とロシアのユジノ・サハリンスク市（ロシア連邦サハリン州）の友好都市盟約書などを参考にして起草作業を進めたとのことである。

当時の文案記録をみると、藤谷豊町長みずから推敲している形跡が確認できるという。例えば、藤枝氏が「自然を保護しようとする両町民の願い」としたところを、「自然を守ることは両町民にとって共通の責務であり、強い願望」と直している箇所がみられるようだ。そのほか、大量の朱が入っていることから、姉妹町盟約の理念をひとつひとつ浮き彫りにしていく藤谷氏の姿が目に浮かぶ。

11月９日、斜里町長・藤谷豊氏と斜里町議会議長の赤木寅一氏（1902年生）は、起草した盟約書を携えて上京した。東京で両町長が初の顔合わせが実現したのである。この会合に、竹富町からは瀬戸弘氏、竹富議会議長・屋良一氏（1941年生）が出席した。そのほか、秋山智弘氏も参加している。ここで盟約書の文案が確認され、最終的なかたちに整えられた。

修正された盟約書の文案は両町にそれぞれ持ち帰られ、12月18日の両町各議会において議案として提出された。そして、姉妹町盟約は両町議会ともに全会一致をもって同日同時に議決された。そして、姉妹町盟約の調印式は、年明けに東京で開催される「全国町村大会」に合わせて行なわれることになった。

⑸姉妹町盟約調印式

1973年（昭和48）１月10日、この日はお日柄もよく、大安吉日である。

『八重山毎日新聞』には、調印式の前日に「10日　姉妹町の調印―北海道の斜里町と竹富―」の見出しで、日時・場所を記しただけの形式的な記事が掲載されている（1973年１月９日付）。瀬戸氏はどんな気持ちで調印式に臨んだのだろうか。

> 昭和四十八年新春早々の一月、東京平河の都市センターにおいて、元総理府副長官栗山廉平氏の仲介で、沢田所長や学研の原局長、盟約草稿された秋山氏、その他斜里町の議員及び町職員、学研の方、報道人等の多数見守る中で両町を代表して、両町長、議長が、準備された姉妹盟約書に調印し、名実共に提携することになった。〈瀬戸〉

瀬戸氏は「又、同日 NHK で姉妹町盟約による両町の紹介で両町長の今後における交流提携等の放送がなされ全日程を終了した」と述べるが、ここではより具体的な記述である「交流のはじまり」に依拠することにする。

調印式典に先立って、NHK 総合テレビの朝の生放送番組「スタジオ102」に両町長が出演した。放送では最初に両町の概要をそれぞれの町長が紹介したあと、盟約後の抱負や事業の説明が予定されていたが、藤谷氏が持ち時間を超過して熱く語り続けるうちに番組が終了したそうだ。それでも番組の反響は大きく、放送後の控え室に盟約を祝う電話が鳴り止まなかったという。

そして調印式は予定時刻を過ぎて、午前10時30分より千代田区平河町の日本都市センター会館にて

挙行された。式典の出席者について、ここでも「交流のはじまり」によって確認しておこう。

立会人の栗山廉平氏、西表国立公園管理事務所の澤田栄介氏をはじめ、竹富町からは瀬戸弘町長、町議会議長の屋良一氏が、斜里町からは藤谷豊町長、町議会議長の赤木寅一氏、副議長の宮内武氏、議員の木村健二氏と炭野信雄氏が出席した。そして司会進行を務めたのは、学研映画局制作部次長の秋山智弘氏である。そのほか学研常務の原正次氏、映画局制作部部長の石川茂樹氏らが出席している。

推敲を重ねた「盟約書」は次のとおりである。

盟　約　書

北海道斜里町と沖縄県竹富町は、日本列島の東北端と西南端に位置し、夫々その行政区域内に、原始性豊かな知床国立公園、西表国立公園をかかえています。この両国立公園を中心とする勝れた自然環境を保全し、これを活用することによって　地域社会の振興を図ることは、両町民にとって共通の責務であり、強い願望でもあります。

よって両町は、

1．知床、西表両国立公園の観光開発、自然保護についての意見交換

1．両町の行政活動に関しての相互紹介

1．両町間における各種団体、町民間の交流

1．両町民の生活を反映した写真、実物教科資料および児童、生徒の絵画、作文等の相互交換

1．両町の観光事業、広報活動の提携および特産物等の相互紹介等各分野の交流を通じ、両町間の友情と理解を深めながら、併せて北海道と沖縄県の親善を促進し、ひいてはこれが美しく豊かな日本の国づくりと、人類生存の基盤ともいうべき自然保護の高揚に寄与することを念願し、ここに両町が姉妹町として提携することを盟約します。

昭和48年１月10日

北海道斜里町長　藤谷　豊　㊞

沖縄県竹富町長　瀬戸　弘　㊞

両町長の署名捺印、そして両議長の承認をもって盟約書が交わされ、式典は滞りなく終了した。

ところで、瀬戸氏は「午後からは、銀座ホテルで両町の東京郷友会や関係者多数出席の下で、両町のフィルムによる紹介や、両町長の自然保護行政に対する考えと姉妹町締結の喜びの挨拶が行われた」というが、調印式の「午後からは」、「全国町村長大会」が開催されているはずだ。

１月11日午後１時より、東京都中央区銀座の銀座ガスホールで、秋山智弘氏の記録映画作品である「日本の国立公園―北海道の自然」、「海と太陽の島―おきなわ」の２本が上映された。自然と文化を紹介するとき、今も昔も映像の訴える力は大きい。これらの映像は竹富町・斜里町の姉妹町盟約に大きな役割を果たたともいえるだろう。

さて、西表国立公園の指定を契機に始まった交流は、盟約書の理念に沿いながら、50年を経て交流の輪が広がっている。それは行政主導の交流に留まらず、両町民間の家族ぐるみによる交流も生まれている。そのほか、青年会や婦人会など、両町の任意団体もお互いの地を活発に訪問しあい親睦を深

めている＊7。

また両町の親睦交流は、斜里町による漁業技術の指導や、サトウキビ刈りに援農青年の派遣など、現実的な課題の克服に寄与しているところにも大きな特色が見いだせるだろう。

そしてこれから先も、「美しく豊かな日本の国づくりと、人類生存の基盤ともいうべき自然保護の高揚に寄与すること」を念頭に、両町のさらなる親睦を深める交流の継続を願うものである。

この意義ある姉妹町盟約に漕ぎつけることができたのは、勿論藤谷町長の自然環境保全に対する熱意によるものであるが、陰となって努力された沢田所長や学研の秋山氏に負うところが多かった。又、仲介の労をとって頂いた栗山元総理府副長官のお骨折りの賜ものとして深く謝意を申し上げると共に、この姉妹町盟約を遵守し以って両町の繁栄を祈念することにした。〈瀬戸〉

瀬戸氏は、姉妹町盟約の実現は、まず藤谷豊氏の自然環境の保全に対する熱意によるところが大きいとしている。同時に影の立役者として澤田栄介氏、秋山智弘氏の名前を挙げている。ちなみに、立会人となった栗山廉平氏は、盟約の前年（1972年）まで総理府総務副長官を務めたが、その仲介となったのも、やはり彼の部下であり山仲間であった澤田氏なのである。

〈写真２〉調印式会場での記念撮影。左端司会は秋山智弘氏。
後列左より炭野信雄氏、木村健二氏、宮内武氏、喜屋武優氏。
前列左より栗山廉平氏、赤木寅一氏、藤谷豊氏、瀬戸弘氏、屋良一氏、澤田栄介氏。
（提供　斜里町立知床博物館）

1976年（同51）、澤田氏は初代西表国立公園管理事務所所長として３年余の勤務を終え、環境庁自然保護計画課へ転勤することになった。そのとき、新たな職場について、西表の東京事務局のようなものだと語ったそうだ＊8。

３．世界自然遺産の登録

両町は現在、盟約書の交わされた当時とは異なる新たな局面を迎えている。斜里町を含む知床が、2005年（平成17）に世界自然遺産登録された。

西表国立公園は、2007年（同19）に公園区域が西表島のほぼ全域に拡張され、また石垣島の一部と地先海面を編入したことにより、「西表石垣国立公園」と改称された。また、竹富町の西表島を含む「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」が、2021年（令和３）に世界自然遺産の登録が決定した。

現在、環境問題、特に地球温暖化の影響は著しく、自然環境に対する考えも、世界さらには地球レ

ベルの課題となっている。今後、両町の自然保護を基調とした盟約は、ますます重要性を帯びてくるであろう。将来を見据えた先人の英断に敬意を払うと同時に、盟約の理念を今一度見つめなおし、さらに深化させていたいものである。

いみじくも斜里町歌《斜里まちの歌》３番は次のようにうたっている。

わが町の旗おし立てて　心を合わせひるまずに
試練に耐えてこの斜里を　にぎわいやまぬしあわせな
明るい町につくりあげ
世界の人を友として　広く交わりとわに栄えん

この精神は、西表島大富集落のシンボルである旗頭の旗文字の「和衷協力」と響き合うものがある。この心意は、旗頭のもとで皆が「心を合わせ」て協力するということである＊9。それは竹富島の「うつぐみ」、波照間島の「すむずれ」（肝揃）、黒島の「きむぴしち　いるぴしち」（肝一つ　色一つ）など、竹富町の島々に古くから伝わる言葉にも通じる精神性がよみとれるのである。

両者の世界自然遺産の登録も「人類生存の基盤ともいうべき自然保護の高揚に寄与」するものでなければならない。そうすることで、おのずと「世界の人を友として／広く交わりとわに栄え」ることであろう。

注記

＊１　竹富町の町花は月桃。

＊２　内田暁友「竹富町と斜里町の交流のはじまり」５～６頁参照。『自然と歴史が結んだ絆』（斜里町立知床博物館、2014年）に収録。以下、「交流のはじまり」と略記。

＊３　藤谷豊氏は、1977年（昭和52）に「みどりと人間の調和を求めて」を基本理念とした「しれとこ百平方メートル運動」を展開して全国に知られた。

＊４　澤田栄介氏は学生時代から登山に熱中し、その後、山岳地域各地でレンジャーを歴任。また、井上靖の小説『氷壁』（1956年から1957年に『朝日新聞』で連載）は、澤田氏のパーティーによる遭難がモデルになったというエピソードが知られている。

＊５　三木健氏の論文に「琉球弧の宝庫・西表島―自然と開発との相克―」（『歴博』〈第175号〉国立歴史民俗博物館、2012年）がある。

＊６「交流のはじまり」９頁参照。

＊７　那根操「40年の「絆」に乾杯」（『自然と歴史が結んだ絆』）19頁に、家族間の交流例として、那根家（西表島祖納）の交流が記されている。

＊８「政府二機関の初代所長が去る　農業基盤整備と自然保護―両氏に聞く　展望と住民への要望―」『八重山毎日新聞』1976年４月８日付参照。

＊９　佐事安弘「和衷協力」（『竹富町史だより』〈第48号〉竹富町教育委員会、2021年）２頁参照。

参考文献

・瀬戸弘『竹富の島々と共に』（私家本、1982年）
・町制30周年記念誌編纂委員会編『町制三十周年記念誌　町制三十年のあゆみ』（竹富町役場、1978年）
・竹富町史編集室偏『竹富町制施行50周年記念誌　ぱいぬしまじま50』（竹富町、1998年）
・『自然と歴史が結んだ絆―竹富町・弘前市と斜里町との交流の歴史―』（斜里町立知床博物館、2014年）

大自然しれとこ

“自然・文化・人との出会い”

竹富町・斜里町職員交流事業に参加して
平成10年８月１日～平成10年９月１日
〈平成10年９月21日付交流事業復命書〉

竹富町経済課
技師　宜間正八

【写真１】知床灯台をバックに。

はじめに

平成10年８月、姉妹町北海道斜里町との職員交流が実現しました。

竹富町制施行50周年、北海道斜里町開基120周年、姉妹町盟約25周年の節目の年に、交流職員として任命されたことに大きな意義と喜びを感じます。

「斜里町」については、私もそうであるが本町職員の大半が「竹富町の姉妹町」程度の認識しかなく、情報不足のなか期待と不安を抱え北海道へ向いました。

斜里町は、北海道の北東部、知床半島付け根部よりオホーツク海に面した半島岬までの広範域。なお、知床半島連山を隔てて東南部は羅臼町。開基120年、町制施行59年。人口約14,200人。産業は農業（馬鈴薯、ビート、小麦、玉ねぎ、人参等）、林業、漁業、観光業など。観光入域者数年間約170万人。町立病院､スポーツ施設等を整備し､教育・福祉面においても充実している。町役場職員定数272人、議員定数22人。

友好都市　青森県弘前市（盟約15周年）。

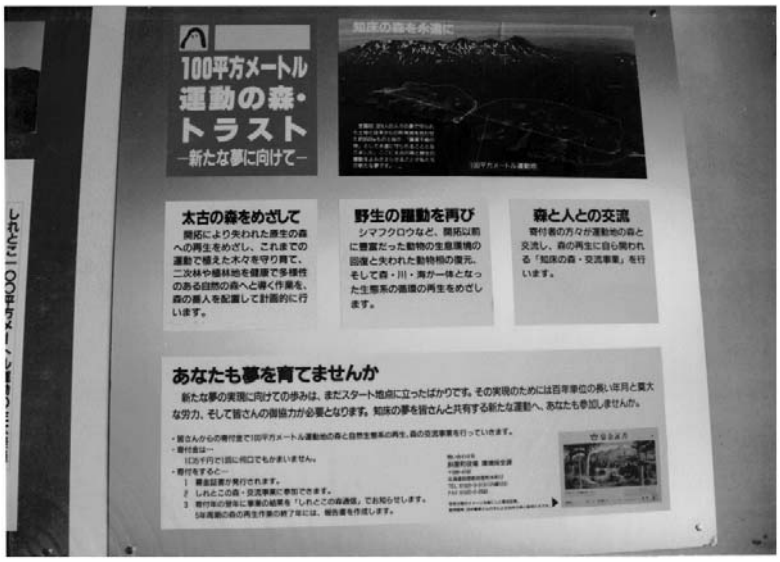
しれとこ国立公園、「知床100㎡運動・トラスト」で知られている。

「知床100㎡運動の森・トラスト」について

この運動に参加協力されている方々でも誤解されていることがあるように思われます。

知床には、もともと原生林の大自然が広がっていました。その広大な土地を本州の農民らが開拓目的に進入し、草木を刈り払い大木を切り倒し森を農地に変え本格的に農業を始めた訳けです。

しかし、予想もしなかった気候（吹雪、大雪等）の厳しさを前に農業をあきらめ、それぞれが低地（平野部）へと去っていきました。その後、その開墾放棄された農地は土地投資ブームのあおりを受け乱開発の危機にさらされる中、斜里町は全国的に寄付金（100㎡単位8,000円）を募り、その私有地を買い占めるための運動を始めました。それが「しれとこで夢を買いませんか」のキャッチフレーズで知られる「100㎡運動」で、たまに聞かれる「斜里に100㎡の土地を買ってある」というのは、ちょっとした誤解のようです。その運動も、平成９年度には土地買収目標額に達し、平成10年度からは、その土地を元の原生林に再生・復元する次のステップ「100㎡運動の森・トラスト」とは、がスタートし、「知床で夢を育てませんか」の新たなキャッチフレーズで募金（１口5,000円）を呼びかけ植林等の再生活動を展開しています。



【写真２】「知床100平方メートル運動の森・トラスト」とは、買い上げした土地に植林し、元の森とそこに住んでいた動植物を再生・復元させようと進められている事業。

そして、この100㎡運動に参加協力されている方々の子供たちを対象に自然体験交流事業「知床自然教室（100㎡運動地においてテントを張り自然学習等を行う)」が、毎年、夏休みはじめに（１週間の日程）開催されています。

今年は、７月30日～８月５日（６泊７日）の日程で行われ、幸いに私もこの「知床自然教室」に参加することができました。

８月２日（日）午後１時30分、北海道女満別空港に到着し斜里町へ直行。気温27度、晴れ。やや涼しい気温。斜里町総務課の佐藤昭　厚生担当係長の出迎え案内により、約１時間で斜里町役場に到着。ありきたりの表現だが、とにかく広い。直線道路がどこまでも続く。話に聞いていたとおりの光景が目の前に広がる。不安半分、これから始まる未知の時間に期待も感じる。

知床自然教室参加

斜里町役場庁舎、独身寮へと佐藤係長に案内され、着替える間もなく「知床自然教室」に合流するためウトロ（100㎡運動地）へ向かいました。日程的に、自然教室は４日目の内容を消化。小学４年生から高校３年生までを対象に、全国各地から35名の児童生徒と、スタッフ、ボランティアら総勢約70名が自然教室に参加していました。

海岸沿いの林を山手に抜けると平地が開け、いかにも不自然な原野にたどり着く。過去に森林が生い茂り、たくさんの動植物が生息してたであろう。そこで自然教室が行われていました。

【写真３】全国各地から約30名の子どもたちが参加。６つの班に分かれて協力しながらテント生活。

沖縄で言うビーチキャンプを想像していただけに、「野営」という本格的なテント生活に若干の戸惑い。

しかし、大自然の中でそれぞれの班が仲間同士協力し合い全てを手がける。あちらこちらで食事支度の煙が立ちのぼり、笑い声が絶えない。素直でがむしゃらな子供たちの生き生きとした笑顔がたくましい。

午後９時、子供たちが就寝後にスタッフミーティング。とにかく寒い。昼間の気温が27度、そしてその晩は12度前後、八重山なら真冬の気温である。Ｔシャツ姿の自分が愚かに思えた北海道の真夏の夜と前途多難な職員交流初日でした。

自然教室参加２日目、午前４時に目覚め。空気がやや冷たいものの爽やかな夜明け。午前４時に起床することなどほとんどなく、新鮮な朝日を眺めながら、ふと石垣での日頃の生活がみじめに思え、心が洗われるような爽快感と気持ちに余裕も。

再生された森と再生途中の森、動植物を含めて元の自然のあるべき姿を子供たちなりに思考する。10年後、そして20年後の彼らとこの森を想像するととても楽しみである。

わずか２日間の自然教室参加でしたが、素直で友情的な子供たちと過ごし、いろんな面で子供たちに教えられ初心に帰れた気がしました。

【写真４】自然教室に参加する子供たちと・・・。

辞令交付式と歓迎会

８月４日、午前中に自然教室を切り上げ、午後１時30分より辞令交付式。

部長級以上の方々の出席のもと、町長室にて午来町長より辞令を受ける。

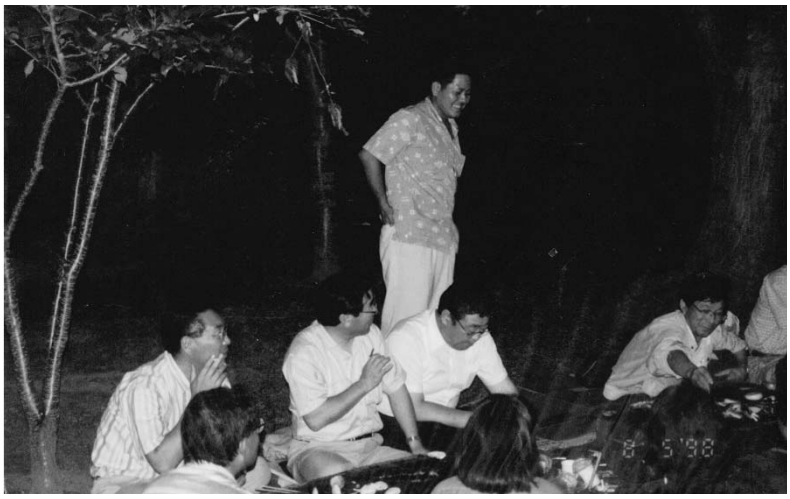
〔斜里町事務吏員に併任する。環境生活部勤務を命ずる。〕

緊張のあまり、午来町長の歓迎の言葉も耳に入らず、ただ自分の置かれている責務の大きさを痛感。『両町職員間の初めての交流であり、限られた期間でいろんな所に出かけ、いろんなものを見て、聞いて、触れて感じることが今回の交流の収穫になると思う。町役場職員に限らず地域の方とも多くの交流をしたい。何事にもチャレンジしたい。』旨を発したと記憶している。

その後、環境保全課自然保護係（斜里町交流職員・河井謙氏）の席に配属され、各課関係機関へあいさつ廻り。各職員、各関係機関とも暖かく受け入れて頂いたことが印象的でした。会う人それぞれがとても好意的で、その後は自然体に過ごすことができました。

環境生活部では、町長・助役・部長等出席のもと屋外バーベキューで歓迎を受け、新鮮な海産物を食し、沖縄にない魚介類がなんとも美味く北海道産ビールが格別。斜里の方々の賑やかなところはどこか沖縄人と共通するところがあるように思えました。

【写真５】町長、環境生活部長、課長、その他職員参加で海産物など豪華なバーベキュー。



【写真６】和気あいあいの雰囲気に緊張も解けはじめる。

環境生活部の業務

環境生活部には４つの課があり、戸籍住民・年金・保健医療・交通安全・住民活動を受け持つ住民生活課、自然保護・衛生・環境対策を担う環境保全課、その他清掃センター、自然保護施設管理事務所等を統括しています。その中で、環境保全課は100㎡運動事務や知床国立公園管理に関する業務、衛生、リサイクル等、その他諸々の業務を担っています。そして、近年世界的に問題視されている CO２（二酸化炭素）排出削減問題に関しては、ハイブリッドカー（電気とガソリンエンジンを併用し稼働する）を導入するなど積極的に取り組んでいます。

リサイクルに対する町民の理解と協力体制も徹底されており、ごみステーション（ごみ置場）を町内に400カ所設置し、町内を３ブロックに区割りローテーションで毎月第４日曜日に回収作業を実施。紙類・牛乳パック・空瓶・空缶・ペットボトル・発泡スチロール等はゴミステーションに持ち寄る前に各家庭で分別し、その他食用廃油・衣類・家具等は各家庭でリサイクルセンターへ搬入することになっています。そこで圧縮可能なもの（空缶・空瓶・発泡スチロール・ペットボトル）はプレス機でブロック状に圧縮し、紙類は(段ボール・雑誌新聞別)各引取業者のトレーラへと移し分けられます。

８月24日（日）リサイクルの日、回収作業に参加させてもらいました。リサイクルセンターに従事しているシルバーセンターの方々、午来町長はじめ環境生活部長、環境保全課職員、各課より２名の職員、約50人で回収作業を行いました。午前６時にセンターに集合し、各班に分かれて回収車で各ステーションを巡回回収。どのステーションも分別が徹底され、地域と行政のリサイクルの取り組みに関心させられました。

竹富町においても、近年、ダイオキシン等の問題が重要視されており、行政形態、地理的状況は斜里町とは違うものの、資源ゴミや産業廃棄物等に関するゴミ処理問題について、住民と行政がひとつになって取り組まなければならないと実感させられました。

自然保護係

係長と技師、研究員（獣医）で係を担う。知床五湖など半島に点在する観光・研究施設などの維持管理業務と、100㎡運動の事務のほか熊や鹿の対策、また知床に生息する動植物に関する業務を担う。係長や研究員は熊などの専門的な知識を備え、その分野における有識者である。

本来、ヒグマは野生的であるが近年観光客による餌付け（菓子類やソーセージ等を投げ与える）が増え、それを覚えたヒグマが人間を恐れずに近寄って来る傾向があり、ヒグマが逆上していつ襲われてもおかしくない状況にあるといいます。人間界とかけ離れた野生の動物が、人間と同じ食を好むこと自体「自然」とは言えず、その自然のルールを壊したのは人間であり、そこで観光客のあり方が問われています。ヒグマなどの自然の生き物を守ろうとする側と、ヒグマを単なるペット的に感じている第３者もいます。それによって、人間の食べ物を目当てに人里に現れるヒグマも増え、そのたびにヒグマが射殺されることも。自然との共存共栄は原点と考えますが、守るのは人間であり壊すのも人間。自然が観光資源である我が町では果たしてどうでしょう？「西表やまねこ」について、どう考えどう取り組んでいるのか、類似した問題に改めて問いかけられる思いです。

【写真７】クマ捕獲装置。

【写真８】クマ捕獲用のワナ。直径60㎝の管。

知床岬立ち入り調査

しれとこ岬半島地域は、希少動植物の生息地です。貴重な自然環境を保護するため、一般人の立ち入りが規制されています。しかし、十分な監視体制がないため、上陸する観光客やキャンパー、釣り客が後を絶たず、ゴミの散乱など様々な問題が生じています。また、キャンパーのテントや番屋（夏場だけ利用される漁師の仮小屋）の食料がヒグマに荒らされるなどの被害が発生しており、人間が襲われる危険性も高まってきています。

そのようなことから、環境庁と各関係機関による知床岬地域の立入り調査（上陸人数や目的、行動などの具体的な把握）が昨年に続き実施され、斜里町役場から自然保護係・山中正実係長とともに宜間も参加することができました。

８月12日（水）９時30分、調査員15名を乗せたチャーター船はウトロ漁港を出港。海上天候も良く半島の段丘を眺めながら知床岬へと走る。約２時間半後、岬へ到着。地図上で見ると僅かな岬部分でも、実際に上陸してみると想像以上に広い「大地」である。晴天の日は国後諸島が見渡せるようですが、岬先端は霧で視界が悪くあいにく見えず。しかし、沖縄人としては初めてであろう知床岬への上陸に興奮し、ましてや誰もが立ち入ることのできない日本最東北端の地に立っている自分に優越感さえ覚えました。

海岸沿いには、オホーツク海から打ち寄せる波に削られて形づくられた芸術的な岩が立ち並び、自然が生みなす壮大で神秘な風景がありました。

上陸を規制することは、自然保護において最善策ですが、観光資源として知床岬のその景観は大きな価値があり、美しい景観を残し、そして多くの人がその美しさを共感してこそ、一層価値が高まるものと考えます。一定の規制と条件付けをしつつ、徹底した指導等を行い限定的に開放するなど、新たな観光スポットにも成りうるのではと個人的に感じました。

床岬地域の立ち入り調査は21日まで続けられましたが、ボランティア調査班を残し他のメンバーは翌13日に岬を離れました。

【写真９】知床岬地区の立て看板。「知床岬地区知床国立公園特別保護地区岬一帯は、動植物保護のため立ち入りを厳しく規制しています。環境庁林野庁」とある。

異常気象

今年の北海道の夏（８月）は例年と違っていました。青空が見えたのは５日間程度。それ以外は曇りで雲が低く、霧がかった日々でした。天気予報があてにならず、気温の変化が激しく体調管理に気を遣いました。

早朝、斜里からウトロ地区までの約40㎞の道のりを、霧の中ハイブリットカーで作業に出かける日も何度かありました。

宿舎寮の部屋ではストーブをたく日もあり、後で聞いた話ですが今年の北海道は異常気象だとい

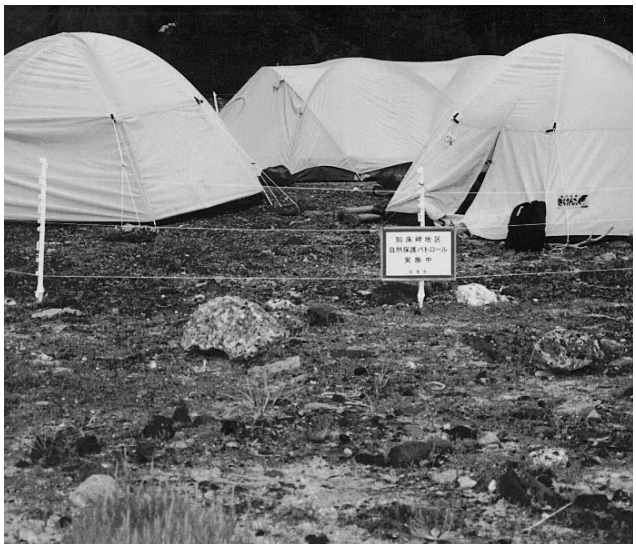
う。北海道の夏も沖縄と同じで太陽が照りつけるが今年は違うそうです。

寮の仲間たちで羅臼岳登山を計画するも２度にわたって雨で中止となるなど、慣れない気候に自分だけが寒いのかと思えば、斜里の人でさえも寒いと感じるほどの曇り続きの斜里の８月でした。

８月29日（土）、東北から北海道にかけての範域で洪水警報が発令されました。折からの長雨により、斜里においても河川の氾濫や床下浸水等の被害が発生しました。早朝から、男子職員のほとんどが役場災害対策本部に招集され、私も参加しました。私の宿舎寮の周辺でも床下浸水がありポンプ車が出動し、沖縄ではめったに見ることのない光景でした。斜里町では平成６年にも水害が発生したようで、今回はそれに次ぐ大規模な水害だそうです。私は農道水路の氾濫による床下浸水のおそれのある住宅周囲の土嚢積みに加わり約20名で作業を実施。用水路の水位は変化し、降り続く小雨に二次災害が心配される中、それぞれの班で各対策を講じ解散しましたが、降雨のため翌日まで自宅待機の状況が続きました。

斜里で数年に一度という事態に遭遇し、職員とともに応急活動に参加したことは貴重な経験でした。

【写真10】知床岬立入状況調査。夏の間のみ利用される漁港。



【写真11】宿泊テントの周囲にはクマよけの電気

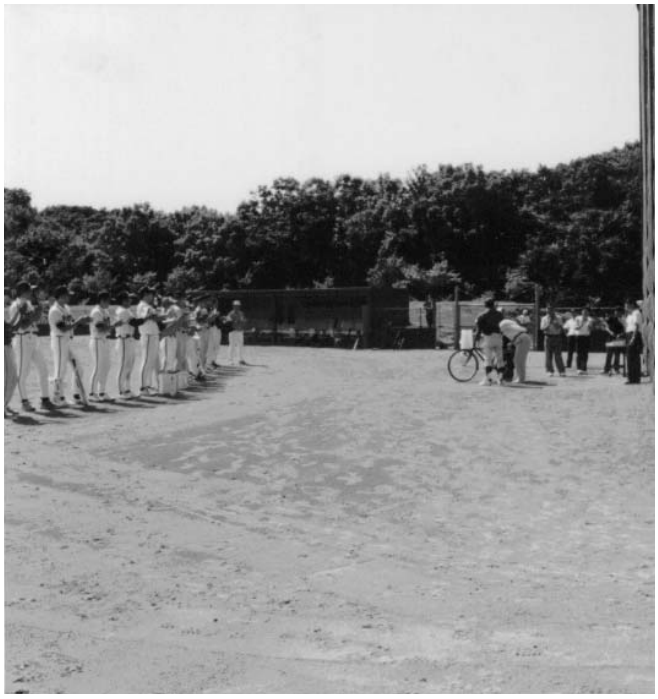
収穫祈願祭と野球大会

役場内外においても数々の体験をさせてもらいました。

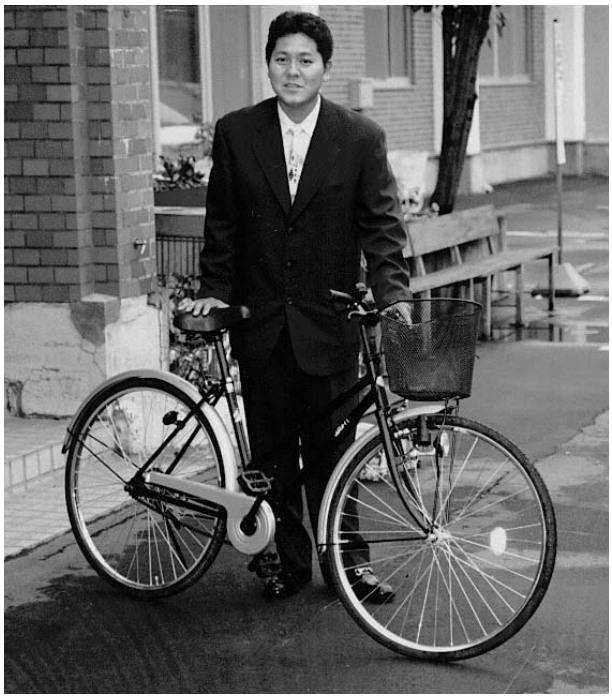
８月21日から３日間にわたって斜里神社の祭典（収穫祈願祭）が行われ、出店や各種の催しで賑わい、その一環として御輿行列に参加することができました。平日でしたが、神社からの参加要請により参加する職員は職専免扱いで参加。２日間にわたり、１トン余りの神輿が約40名の男達によって町内を練り歩き、様々な職場から選出された担ぎ手は体格もばらばらで予想以上にハードでしたが、担ぎきったあとは満足感でいっぱい。

そして、もう一つの目玉イベント「祭典東西オールスター野球大会」に出場することができました。大会は、町内を東西に分け約10チームの選手の中から、監督と連盟会から推薦・選抜された選手のみが出場できる誇りある大会。そこに私が出場できたのも、すべての方々の暖かい心遣いであり、とても光栄でした。しかも、西軍チームの３塁手・５番打者を任され、奇跡的にも４打数３安打（打率７

割５分）・２盗塁のまぐれ的な活躍で西軍チームの優勝と最優秀選手賞を獲得し、副賞に自転車と豪華ホテルの宿泊券を頂き、副賞の自転車は斜里町社会福祉協議会へ「両町の架け橋・ぱいぬしま号」と称して寄贈、宿泊券は結婚予定のある独身寮の仲間へプレゼントしました。



【写真12】斜里町東西オールスター野球大会に出場、最優秀選手賞獲得。



【写真13】斜里町社会福祉協議会に寄贈した副賞の自転車「ぱいぬしま号」。

職員交流最終日

８月31日（月）職員交流最終日。

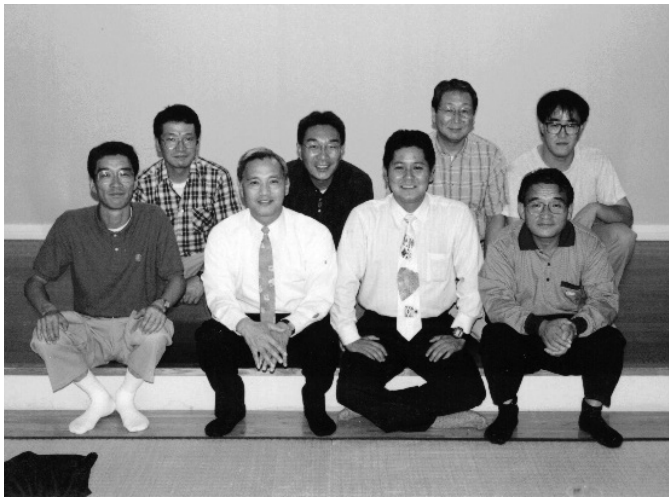
午前中はいつもどおり100㎡運動の事務補助業務。２日前の災害処理で、庁舎内は慌ただしい。

午後１時より辞令交付式。**〔斜里町事務吏員の併任を解く〕。**

斜里町選挙管理委員会事務局長の退職及び青森県弘前市役所からの交流職員の解任辞令と併せて行われました。本当にあっという間の１月間。ほっとする気持ちと、何かしら寂しい気持が交錯し満足感が込みあげる時間でした。

その晩、環境保全課の皆さんが送別会を企画していただき、関根助役や佐藤環境生活部長も出席され賑やかな会を開いていただきました。着任の時から感じていましたが、助役、部長、課長の皆さん、職員同士が気取ることなく、ざっくばらんで和気あいあいの雰囲気があり、そのお陰で１カ月間リラックスして過ごすことができました。

【写真14】最終日、町長より辞令と記念品を受け取る。



【写真15】関根助役と環境保全課の皆さん（送別会）。

おわりに

９月１日　町長、助役、議会議長など全職員が盛大な見送りのセレモニーまで開いていただきました。交流最後の日に、職員の皆さんへ自らの沖縄の三線を披露することができ、また佐藤環境生活部長のユニークなカチャーシが忘れられず、思い出に残るセレモニーでした。

【写真16】９月１日、ロビーにて見送りセレモニー。佐藤環境生活部長（左）がカチャーシで盛り上げていただきました。

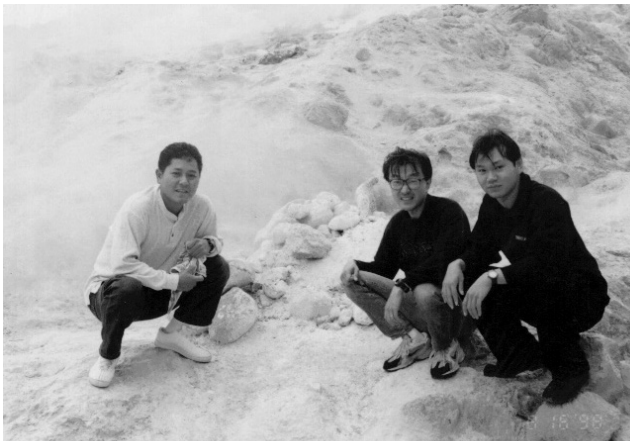
振り返ると、あっという間に過ぎた１カ月間でしたが、着任した頃の不安と緊張感は、最後は充実感でいっぱいでした。

当初の目標である「自然・文化・人との交流」も、思い残すことなく達成できました。大自然の中で出会ったヒグマの雄姿。沢山の人々に支え守り続けられてきた祭り。様々な場面で出会った方々との心に残る触れ合い。全てが、かけがえのない素晴らしい貴重な体験ばかりでした。

姉妹町職員交流の第１号として参加できたことの誇りと満足感。今後の公務員生活において大きな財産です。

今回の職員交流で得た様々な経験を、これからの両町の友好交流事業と今後の町政運営並びに町民福祉向上に微力ながら活かしていく決意であります。

終わりに、斜里独身寮の仲間たち、そしてお世話を頂きました斜里町役場並びに斜里町民の皆様、関係機関の方々に感謝を申し上げ、今後も姉妹町職員交流が継続されますことを要望し、まとまりのないレポートではありますが本職員交流の報告といたします。



【写真17】心に残る子供たちの笑顔（自然教室）。【写真18】独身寮の仲間と休日に硫黄山へ。

【写真19】牛来町長ほか部長の皆様と退任記念写真。【写真20】ヒグマと遭遇。

復　命　書

平成10年８月１日から平成10年９月１日まで出張したのでその結果（状況）は下記のとおりであったので復命します。

平成10年９月21日

経済課技師　宜　間　正　八

竹富町長殿

記

１　用務　　竹富町・斜里町職員交流

１　目的地　　北海道斜里町　斜里町役場

１　用務経過

８月１日　17：30石垣発那覇へ

８月２日　８：30那覇発羽田乗継ぎにて女満別空港へ

15：30現地斜里町へ到着

以後　職員交流

９月１日　20：00帰省

今回の職員交流について別紙の通り報告します。

※本稿は、1998年（平成10）８月１日～９月１日の期間、竹富町・斜里町職員交流事業に参加した経済課技師・宜間正八（※当時）の復命書から、用務報告されたものを写真と併せて再構成していただきました。

斜里町との漁業の交流

波照間　純　一

１．定置漁業権

漁業法（昭和24年12月15日法267）は、総合的な漁場の利用により、漁業の発展を目的とした法律です。その第１条には、「この法律は、漁業生産に関する基本的制度を定め、漁業者及び漁業従事者を主体とする漁業調整機構の運用によって水面を総合的に利用し、もって漁業生産力を発展させ、あわせて漁業の民主化を図ることを目的とする」とうたわれています。

漁業法のなかには、漁業権の意義を総括的に示す規定はみられませんが、一定の漁業「定置、区画、共同の各漁業」を営む権利であり、都道府県知事の免許によって設定され、土地に関する規定が準用されるため物権として扱われる旨が規定されています。漁業権の一般的意義は、「漁業権とは特定の水面において特定の漁業を営む絶対権であって、行政庁の免許によって設定される権利である」と定義できます。その漁業権には４種類がありますが、「定置漁業権」は定置網による漁業を営む漁業権のことをいいます。

八重山漁協は、昭和49年代（1974年11月１日～1983年８月31日）に、西表浦内地先、西表鹿川湾地先、波照間島下田原地先に定置漁業権を設定しました。当該漁業権を設定した大きな動機のひとつに、竹富町と北海道斜里町が姉妹町の締結による漁業振興の一環がありました。

２．定置網設置の適地調査

1973年（昭和48)、竹富町は北海道の斜里町と姉妹町の締結が実現しました。当時の斜里町長・藤谷豊氏は、知床の海に定置網の設定を成功させ、サケ、マスの漁場を開発した斜里の漁業者たちの実績から、「この成果をもって沖縄の海に挑戦してみたい」と、竹富町と協同した漁業の開発に思い立ったといいます。

早速、斜里第一漁協の漁業者８名（海下藤市団長）は、1973年８月24から27日にかけて、定置網事業の適地調査のため竹富町を訪問しています。調査の結果、適地として西表島鹿川湾やウナリ崎が選ばれ、事業計画が立てられました。

３．定置網設置の事業経過

1973年（昭和48）12月、沖縄漁業開発事業団が結成され、翌年（同49）１月から本格的な事業計画が進められました。１月24日、加藤慶之助団長ら６名からなる先発隊が空路で、９名が後発隊として海路で竹富町に向かいました。後発隊は豊慶漁業部の96ｔの大型船「丸一丸」が釧路港からの出発。そのとき、大型船では定置網を仕掛けることができないので、約10ｔの「豊慶丸」を曳航しました。ところが、この曳舟が事故に遭遇しました。調査員の一人・木村耕一郎氏の証言は、概ね次のとおりです。

千葉県の沖合を進んでいたところ、深夜２時か、３時ごろに操船できなくなり、曳舟が沈没したので、大型船に危険が及ぶことを懸念し、やむなくロープを切って曳舟を諦めたとのことです。

後発隊は１週間以上かけて、ようやく波照間島に到着しました。丸一丸に積載しといた資機材は陸揚げしたものの、定置網の設置に至らなかったようです。このときの大型定置網は、そのまま竹富町に寄贈されました。

1975年（同50)、定置網設置事業は改めて仕切り直されました。船は北斗水産の「第11和丸」。第11和丸は無事に波照間島まで移送され、冬の波照間の海に定置網設置を実現させました。1976年(同51)１月15日付『八重山毎日新聞』には、その経緯が次のように報道されています。

竹富町の姉妹町である斜里町から、先に小浜島のさとうきび刈り取り作業を手伝っているが、こんどは定置網漁法指導のため12人の漁業関係者が波照間を訪れた。

この定置網漁法は斜里町の漁師が採用している漁法の一つで、一定の海域に大型の袋形の網を設置し潮流に乗ってくる魚群を自然の状態で「追い込む」という漁法。昨年初めに網をわざわざ持参、波照間や西表島周辺で漁場を調査するとともに、定置網を設置しようとしたが、海がシケたことなどもあって実現しなかった。

定置網漁法の指導は、竹富町の在来の漁法を改革して漁業の振興をはかろうと、姉妹町のよしみで世話することになったもので漁法の手ほどきを受けようと波照間から12人の漁師が希望している。

今回の斜里町からの漁業関係者12人は、漁協や漁業会社から送り込まれた人びとで５月まで滞在する予定。現地に渡った一行は、海上シケのおさまりしだい、波照間突堤の西方から北へ約千５百メートルの海域に網を設置することにしている。

しかしこの定置網漁法はじっさい本業として経営するには莫大な資金を必要とする点に無理があるようだ。同漁法のためにその向きの船を購入しなければならず、網も新しいものであれば６千万円もするといわれ、双方では１億円以上になると推計されており、零細漁民にとってこの面が大きな悩みとなるようだ。

その後、実際に水揚げはあったものの、網のメンテナンスに費用がかかったり、船数が不足して地元の漁業者だけでは成り立たない事情があり、継続することができませんでした。また、漁獲しても冷凍して沖縄本島に輸送する手段がなく、島外への出荷が大きな課題として浮上しました。上の報道のとおり、斜里町の漁業者たちは５月に引き揚げていきました。ちなみに、「第11和丸」は竹富町に残し、その後も活用されたとのことです。

斜里町・竹富町の協同で進められた定置網設置事業は、計画通りに進まなかったものの、両町が協力して漁業の発展をめざしたことには、漁業法の目的にかなった、大きな価値を見いだすことでできるのではないでしょうか。

参考資料

・「定置網漁業を通じた竹富町との交流」（『自然と歴史が結んだ絆―竹富町・弘前市と斜里町との交流の歴史―』斜里町立知床博物館、2014年）参照。

斜里町・竹富町親善交流年表

1972年 (昭和47)	12月18日	両町議会で同時刻に姉妹町提携を議決。
1973年 (昭和48)	１月10日	斜里町・竹富町、姉妹町の盟約書締結。
	４月15～22日	斜里町親善訪問団、来町。
	７月２日	斜里町へ本町初の親善訪問団北海道へ。
	７月30～31日	斜里町青年会議所派遣の少年親善使節団が来町。
	８月24～27日	斜里町から漁業指導員が来町。
	８月28日	ＮＨＫ北見放送局で竹富町との児童交流について放映。
1974年 (昭和49)	１月15日	斜里町成人式で竹富町と記念通話を実施。
	２月14日	斜里町の藤谷町長が来町。
	７月31日～８月２日	斜里町へ第２次少年少女使節訪問団派遣。
1975年 (昭和50)	２月１～23日	斜里町農業青年、竹富町で農業体験実習。
1976年 (昭和51)	１月９日	斜里町から農業実習団一行10名来町。
	１月14日	斜里町から漁業関係者12名定置網漁法指導のため来町。
	５月	漁村研修実施。定置網漁業の技術を竹富町に指導のため、斜里町の漁業者14名来町。
	12月１日	斜里老人クラブ連合会役員、竹富町を視察訪問。
	日付不明	佐藤敬一一行、研修で竹富町を訪問。
1977年 (昭和52)	１月30日	斜里町から小浜島へサトウキビ刈り取り青年応援隊が来町。
1978年 (昭和53年)	２月１日	竹富町の電話児童（ダイヤル）化を記念し、両町長や斜里中学校生徒会長会長と竹富小中学校の生徒が通話を実施。
	４月	斜里町職員の石下夫妻が新婚旅行で竹富町を訪問。
	６月７日	阿部佑太郎一行、研修で竹富町を訪問。
	６月	八重山老人クラブ連合会20名、斜里町を訪問。
	７月２日	竹富町制施行30周年記念式典に、斜里町長から祝辞。
	８月17～22日	斜里町開基100周年記念式典に本町親善訪問団、民俗舞踊を披露。
1979年 (昭和54)	４月16～22日	有坂正道一行、研修で竹富町を訪問。
	８月18～21日	竹富町収入役一行、藤谷前町長への感謝状贈呈、及び船津新町長就任の表敬訪問。
	10月	斜里青年会議所役員が竹富町を視察研修。
1980年 (昭和55)	１月24～27日	斜里町青年研修団が来町。
	１月29～２月２日	斜里町の船津町長一行が来町。
	３月	斜里町職員、研修で竹富町を訪問。

	７月18～21日	竹富町長一行、斜里町を表敬訪問。
	９月	斜里町教育長一行、竹富町を親善訪問。
	12月９日	斜里町職員12名、竹富町行政視察訪問。
	日付不明	ホクレン幹部職員５名、研修で竹富町を訪問。
1981年	７月６～10日	竹富町議員団５名、斜里町を表敬訪問。
(昭和56)	７月18日	竹富町職員６名、斜里町行政視察訪問。
	10月	斜里町職員、研修で竹富町を訪問。
1982年	日付不明	斜里町から台風11号による災害見舞金。
(昭和57)		
1983年	１月15日	姉妹町盟約10周年を記念して、斜里町成人式で竹富町と通話を実施。
(昭和58)	３月	斜里町職員、研修で竹富町を訪問。
	３月16日	姉妹町盟約10周年を記念し、斜里町にサトウキビや黒砂糖などを贈呈。
	７月８日	斜里町内に34団体が加盟する「竹富町・弘前市との交流を進める会」が発足。
	10月１～４日	姉妹町盟約10周年記念事業に友利町長一行12名が斜里町を訪問。竹富町物産展を開催。
	11月10～16日	姉妹町盟約10周年記念事業で斜里町の船津町長一行来町、斜里町物産展を開催。
1984年	７月３日	「青い海と緑を守る会」が、竹富町を訪問。
(昭和59)		
1985年	５月28日	「竹富町黒島むつみ会」一行、斜里町を訪問。船津町長、藤谷前町長、竹富町・弘前市との交流を進める会会長らと懇談。
(昭和60)		
	５月29～30日	竹富町婦人会一行、斜里町を訪問。
1987年	１月14～22日	北海道と沖縄と結ぶ「冬トピア知床への旅立へ」本町の児童出発。
(昭和62)	７月１～９日	竹富町議員団、視察研修で斜里町を訪問。
	８月８日	午来町長一行来町、「第１回ぱいぬ島まつり」で斜里町物産コーナーを開設。
	10月３～５日	友利町長一行、「第８回しれとこ産業まつり」で竹富町物産コーナーを出店。
	12月１～５日	竹富町・弘前市との交流を進める会、「竹富町ふれ愛の旅」で竹富町に斜里町民号を派遣。
1988年	２月12～14日	斜里町友好の旅へ本町児童出発。
(昭和63)	２月17日	斜里町議会議員一行が来町。
	６月	午来町長一行、竹富町を親善訪問。
1989年	11月	竹富町、まち並み保存協力のため「竹富町まちなみ保存基金」を設ける。
(平成元)		
1991年	１月	斜里町職員、研修で竹富町を訪問。
(平成３)	３月	斜里町長らが竹富町を親善訪問。
	11月	斜里町、竹富町と弘前市に災害見舞金を送金。
	日付不明	知床温泉旅館組合、竹富町・弘前市との交流を進める会の災害見舞金の募

		金に協力。
1992年	３月29～４月４日	斜里町の皆川助役一行、来町。
（平成４）	５月10～27日	村田学芸員、姉妹町友好都市交流記念館の資料収集調査で竹富町を訪問。
	７月10日	竹富町老人クラブ連合会一行、斜里町を訪問。斜里町老人クラブとゲートボールで親善交流。
	12月５～27日	村田・増田学芸員、姉妹町友好都市交流記念館の資料収集調査で竹富町を訪問。
1993年	７月～10月	竹富町との姉妹町盟約20周年を記念し、知床博物館学芸員らが「斜里新聞」に「姉妹町・竹富町」を寄稿。
（平成５）	７月１～４日	竹富町町制施行45周年記念式典に斜里町長らが出席。
	７月17日～８月６日	村田・増田学芸員、姉妹町友好都市交流記念館の資料収集調査で竹富町を訪問。
	８月２～５日	姉妹町児童交流の旅で、斜里町児童20名が来町。
	９月16～20日	高橋教育長一行、「ぱいぬ島まつり」で斜里町物産展を出店。
	10月１～４日	次呂久課長一行、「第14回しれとこ産業まつり」で竹富町物産展を出店。
	10月26～30日	斜里町民友好の翼一行が来町。
	11月22～25日	斜里町姉妹町友好都市交流記念館開館式。
	11月27日	姉妹町盟約20周年を記念して、戸川幸夫講演会「知床と西表一人と自然」と、パネル写真などの資料展を同時開催。
	日付不明	盟約20周年には、知床100平方メートル運動の理事者、管理職、議会議員の38名が全員参加。
	日付不明	竹富町から台風17号災害見舞金が斜里町へ送られる。
1994年	３月11～13日	那根武さん一家、国際家族年を記念して斜里町を訪問。
（平成６）	３月27～30日	知床児童交流会、斜里町で開催され、本町児童11名出発。
	10月２日	「第15回しれとこ産業まつり」で、竹富町の台風による被害のための災害支援チャリティー募金コーナーを設置。
	12月	北海道東方沖地震で、知床博物館の竹富町壷が破損。竹富島出身の高嶺滝好氏が新たな壷を寄贈。
1995年	１月９～13日	朝日小学校職員とその家族22名、竹富町へ研修旅行。
（平成７）	３月	知床博物館が「３月は姉妹町竹富町との交流の月」で、沖縄伝統ミンサー織りや踊り体験教室、講演会などを企画。
1996年	２月16～17日	竹富町・弘前市姉妹町友好都市学術交流特別講演会の開催。
（平成８）	７月29～８月２日	姉妹町児童交流の旅で斜里町児童22名来町。
	８月29～30日	午来町長一行、「第３回ぱいぬ島まつり」に参加。斜里町物産展を出店。
1997年	７月29～８月２日	斜里町児童交流団一行、竹富島、西表島、波照間島を親善交流。
（平成９）	８月29～31日	斜里町から町長、議長らを招き「ぱいぬ島まつり」を開催。斜里町の特産品を出展。
	12月14～18日	ＪＡ斜里町女性部役員一行、石垣島を視察研修。

1998年	７月１～４日	竹富町制50周年記念事業に斜里町長らが参加。
(平成10)	８月１～９月１日	竹富町制施行50周年・斜里町姉妹町盟約25周年記念に職員交流実施。竹富町から斜里町へ職員派遣交流。
	11月３日	斜里町開基120周年町制施行60周年・姉妹町盟約25周年記念に斜里町で「竹富町・弘前市郷土芸能公演の夕べ」開催。西島本町長と20余人の芸能団が訪問。
1999年	３月27～31日	「姉妹町児童交流の旅」へ本町児童21名出発。
(平成11)	７月３日	ゆめホール知床にて「八重山・津軽・知床の笛」の共演。
	７月29日	竹富町から斜里町へ職員派遣交流。
	７月31日	姉妹町交流の旅で斜里町児童22名が来町。
	８月４日～９月３日	斜里町から竹富町へ職員派遣交流。
	11月５～７日	八重山産業まつりに、よさこいソーラン「しれとこ^{3}粉吹雪」（しれとこ参上こなふぶき）が出演。
2000年	７月４日～８月２日	職員交流実施、竹富町税務課に斜里町より１名派遣。
(平成12)	８月21日～９月26日	竹富町から斜里町へ職員派遣交流。
2001年	３月27～31日	姉妹町児童交流の旅へ本町児童ら24名出発。
(平成13)	７月29～８月２日	姉妹町児童交流の旅へ斜里町児童ら24名が来町。
	８月24～25日	午来町長一行、第５回ぱいぬ島まつりで斜里町物産展を実施。よさこいソーランチームが出演。
	９月27～30日	竹富町職員が斜里町を親善訪問。
	９月28日	斜里町で「竹富島の種子取祭公演」開催。玻座間民俗芸能保存会40名訪問。
2002年	８月５～30日	職員交流実施。斜里町へ１名派遣。
(平成14)	８月５～30日	職員交流実施。竹富町健康保険課に斜里町より１名派遣。
	11月23日	竹富町婦人連合会が斜里町を訪問し、交流会を実施。
2003年	１月25日	西表島出身の山下正雄氏らによる三線コンサートを斜里町で開催。
(平成15)	１月26日	斜里町で一般町民が参加する三線教室が開催。
	３月27～31日	姉妹町児童交流の旅へ本町児童ら25名出発。
	７月１～４日	午来町長一行、竹富町制施行55周年記念式典のために竹富町を訪問。
	７月29日～８月２日	姉妹町自然体験交流として、斜里町の児童が竹富町を訪問。
	９月26～29日	姉妹町盟約30周年記念事業に竹富町訪問団が斜里町を訪問。「しれとこ産業まつり」に参加。
2004年	７月16～17日	斜里町で竹富町特産品即売会を開催。
(平成16)	11月22日	弘前市で「斜里・竹富・弘前民俗芸能交流公演」開催。玻座間民俗芸能保存会40名訪問。
2005年	３月26～30日	「姉妹町児童交流の旅」へ本町児童10名出発。
(平成17)	６月１～３日	大盛町長一行、就任挨拶で斜里町を表敬訪問。
	７月21日	斜里町で竹富町特産品即売会を開催。
	10月29～31日	大盛町長一行、知床世界自然遺産登録記念式典に出席。

	11月３～４日	斜里町の関根助役一行、竹富町内を行政視察、及び表敬訪問。
2006年	２月18～19日	新田長男氏ら４名、斜里町で三線や踊りなどの指導を実施。
(平成18)	７月21～23日	第24回しれとこ斜里ねぷたに竹富町助役が参加。22日に竹富町特産品即売会を開催。
	８月	竹富町から斜里町内の沖縄三線音楽愛好者クラブに太鼓を贈呈。
	10月16～20日	竹富町職員の世界遺産関連研修実施。
	10月27～30日	斜里町の午来町長が来町。竹富島の「種子取祭」を見学。
2007年	１月20～21日	竹富町三線講師ら４名が斜里町を訪問。斜里町児童９名は沖縄三線で《でんさ節》を練習。
(平成19)		
	１月	斜里小学校５年生の授業教材として、竹富町からサトウキビを提供。
	３月８～10日	竹富町民号「流氷の知床へ」24名、斜里町を訪問。
	５月13日	竹富町民６名、斜里町を訪問。
	７月27～29日	斜里町で竹富町特産品即売会を開催。
	８月９～12日	斜里町民謡同好会７名が竹富町を交流訪問。第６回「ぱいぬ島まつり」で民謡を披露。
	９月28日	斜里町議会、定例会議で沖縄戦について「教科書検定に関する意見書」を採択。
	10月21～22日	西表島で「竹富町自然環境フォーラム」を開催。斜里町の午来前町長が来町。
2008年	５月12日	「南北芸能交流の集い―斜里・弘前・竹富・真夏の共演―」実行委員会、大盛町長を訪問。
(平成20)		
	７月25～27日	斜里町で竹富町特産品即売会を開催。
	８月７日	姉妹町盟約35周年記念事業に「南北芸能交流の集い―斜里・弘前・竹富・真夏の共演―」実行委員会が、同月30日に竹富小中学校での開催を発表。
	８月30日	南北芸能交流の集い、竹富町で「ねぷた」運行。
	９月５日	姉妹町盟約35周年記念事業で斜里町立川上小学校リコーダー部の児童13名が来町。
	９月27～30日	姉妹町盟約35周年記念事業に川満町長一行が斜里町を訪問。
	10月16～20日	姉妹町盟約35周年記念事業で斜里町の金田教育長一行43名が来町。
2009年	２月28～３月３日	姉妹町盟約35周年記念事業に本町児童11名出発。
(平成21)	７月23～25日	「第27回しれとこ斜里ねぷた」に竹富町長が参加し、竹富町特産品即売会を開催。
2010年	７月23日	斜里町で竹富町特産品即売会を開催。
(平成22)		
2011年	２月12日	竹富町で撮影した映画「星砂の島のちいさな天使」の上映会、ならびに三線ライブを「ゆめホール知床」にて実施。
(平成23)		
	７月23日	斜里町で竹富町特産品即売会を開催。
	８月18～22日	西表島で「第７回ぱいぬ島まつり」開催。斜里町から馬場町長一行が来町。

2012年 (平成24)	７月28日	斜里町で竹富町特産品即売会を開催。
2013年 (平成25)	１月10日	姉妹町盟約40周年記念事業に竹富町の川満町長、斜里町の馬場町長と電話会談。
	７月１～４日	姉妹町盟約40周年記念事業で斜里町の馬場町長一行52名来町。
	７月27日	斜里町で竹富町特産品即売会を開催。
	８月５～９日	姉妹町派遣交流事業として、斜里ミニバスケットボール少年団の児童10名来町。
	９月20～10月25日	姉妹町盟約40周年を記念し、知床博物館でロビー展「竹富の織りの世界―与那國清介の絣」を開催。
	９月21～23日	竹富町民号68名が斜里町を訪問。産業まつりでの民俗舞踊公演のほか、知床博物館で「竹富の織り体験講座」を開催。
2014年 (平成26)	２月21日	「姉妹町児童交流の旅」へ本町児童11名出発。
	６月22日	竹富町観光協会による講演会「世界自然遺産の保全と持続的な利用について」を西表島で開催。斜里町立知床博物館の山中館長が、講師として来島。
	11月16日	斜里町の商工観光関係者９名が竹富島の物産視察などのため来町。石垣島で交流懇親会。
2019年 (平成31)	２月13日	竹富町の小学５・６年生11名と教諭など４名の引率者計15名が、姉妹町盟約45周年児童交流派遣事業で斜里町へ出発（４泊５日）。知床流水フェスタに参加したり、斜里町立知床博物館などを見学。

離　御　嶽

通　事　孝　作

御嶽はパナリウガンと読む。西表島西部にある西表小中学校の近くにある御嶽で知られる。南隣には寄り添うように西泊大御嶽がある。離御嶽の嶽域は石積みが正方形の形をしており、鳥居はない。

一方、西泊大御嶽は長方形の形をとっている。『八重山島由来記』（1705年）、『琉球国由来記』(1713年）によると、祭神は、神名は嶽名と同じで、「御イベ名ワタリ神通ヒ神」。1705年当時、すでに由来知れずとなっている。

『西表島の伝説』（那根亨著）では「悪疫（パナシキ）払いのウガンとも呼ばれ、島人の健康を祈願するお宮といわれている」（３頁）と記してあり、「港の口を守るウガンである」という伝えもある。『西表島の民俗』（星勲著）には「ふち護拝」とあり、「北泊湾は当時の最も必要港として入出の船の安全を祈る神を祀り公儀大嶽神と船の出入の安全をはかる神。両嶽は同時に創立された。ふち護り神、旅出しの神である」（87頁）といわれる。

近世初頭の西表島西部は入表間切に属し、祖納・干立・多柄・浦内・成屋・船浮・網取・鹿川の８カ村があった（『宮古八重山両島絵図帳』）。のちに1628年（崇禎元）の三間切移行時には大浜間切の西表村・慶田城村に統轄された。『琉球国由来記』にみえる御嶽の所属村から干立・多柄・浦内は西表村、成屋・船浮・網取・鹿川は慶田城村に属し、祖納村には西表村・慶田城村の両村に分掌されていたことが分かる。離御嶽は西表村に帰属する。

御嶽のトウニムトゥは、宮良家と西表家で両家から神司を出している。神司の支配地域は、豊年祭には祖納の御嶽の全神司がクシムリ御嶽（雨神・ミルク神）に集合し、礼拝後、慶田城御嶽、前泊御嶽、西泊大御嶽、離御嶽に巡拝し、離御嶽で解散して各自の御嶽に帰る。世願い、種子取、二月タカビには「ヲハタケ根所」を拝して後、各御嶽に参拝する。神司はチヂビ男一人、御嶽ブサ女子二人を従えて、御嶽の行事を司る。祭祀行事は種子取祭、二月タカビ、世願い、物忌願い、豊年祭で神司を中心に行事が行われる。

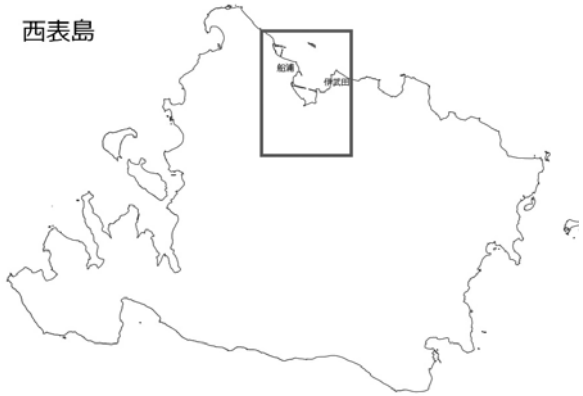
離御嶽（2020年）

離御嶽の来歴は、昔、宮良家より西表家に嫁いだ女が、村の後のウスダン(溜まり水)近くにある畑に行ったとき、石に座った神様がいた。この神は大石原（元成、すなわち成屋のもとにあったところに大石原という場所があった）から沖縄、大和に行かれる途中、天気が悪いのでここに寄られたのを宮良家に招神した。しかし、そこは人通りが多いので現在の地に遷したと伝えられている。そこで神司には西表、宮良両家より出しているとのことである（中山盛茂・富村真演・宮城栄昌『のろ調査資料』279頁)。氏子組織は梅公氏（孫）と蔡林（全）であるという。

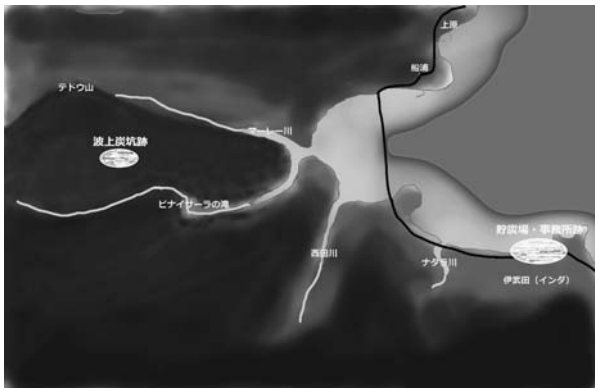
拝殿は木造瓦葺き。イベ域は拝殿の後方にある。正面にアーチ状中門と石灰岩の石積みがある。門の中央に香炉が一基置かれている。その奥の方に方形の石囲いがあり、コンクリート製の台の上に香炉が一基置かれている。

波上坑探究記　～波上炭坑跡～

安　里　　淳



〈図１〉　西表島地図



〈図２〉　波上炭坑跡、伊武田貯炭場・事務所跡の位置図

１．はじめに

炭坑跡発見までを記録した前回の「波上坑探索記」（『竹富町史だより』〈第49号〉収載）。多くの方にお読みいただいたようで大変有り難いことです。

「あの文章だから読んだんだよ。」「今回の町史だよりはとっておく。」等の言葉を頂戴することもあり、感謝致します。特に西表島船浦・上原周辺の方には馴染みのある郷土史の話であった為でしょう。

「場所がどこなのか知りたい。」という御意見もありましたが、調査現場保護の為しばらくの間は詳しい位置はお伝え出来ません。拙いものではありますが掲載の地図で大体の位置を確認していただければと思います。

前回やたらと増えてしまった注釈についても“面白い”との意見がありましたので、今回特に減らす努力は行いませんでした。

そして、今回より研究・追究の段階に入ったものとして“探究記”へと題名を少し変更しました。

今回掲載の文章は、前回の「波上坑探索記」を書き上げてから数日後の2021年（令和３）12月10日の記録となります。この日、再度波上坑口まで行く事になり、連絡路設置だけの予定を逸脱し、またも多くの発見に遭遇しました。調査リーダーである里井洋一（※１）氏より、「もう一本記録が書けるのではないか？」との話があったので、今回の記録により、前回の発見が霞むのを惜しみつつもまた一つ、駄文書き連ねてみます。

２．再び坑口へ

2021年（令和３）12月４日。おそらく約１世紀西表島の自然に埋もれていた、波上炭坑の坑口を発見したことは、前回の「波上坑探索記」に書いた通りであるが、その終わりのほうに、里井氏の西表島再訪の時期について書いた。

しかし、彼の西表島再訪に懸ける意思が予想以上に強く、スピーディであることは捉えきれていなかった。

前回の調査から数日後の12月７、８日のどちらかであったと思うが、村田氏（※２）に12月11日再訪の予定を連絡してきた。

「早い・・早すぎる。」

前回の話であれば、早くとも年明け来年の話のはずだった。

里井氏の頭脳は郷土史研究に向いているのだろうが、野外活動には不安の残る体形と運動能力とを思い浮かべ、反対する。

「まだ坑口までの道すらない。道を開いてから。（そうでないと）無理。」

と、連絡に口を挟み、予定を先延ばしにして

いただいた。

「さて、忙しくなった。」

里井氏は、機会さえあれば訪れる気でいると見受けられる。

早めに坑口まで楽に行ける連絡路を、ジャングル伐開し作らなければならない。

私はひとまず前回の探索ルートを考慮し、地形を読みつつ全長約450m の予定経路を地図上に起こした。

翌日、高山氏（※３）が、インターネットでテドウ登山道の経路図を探し出してくれた。

出処が解らないためどの程度正しいか判断が付きかねたが、観察するに前回発見した坑口まで約100m の地点を登山道は通っていた。

「この地図通りなら、思ったより楽に行けそうだね。」

と、感想を述べた。

３．伐開ルート

数日経ること12月10日。探検隊隊長と化した村田氏。そして高山氏と私も含め再び山に向かった。

私の考える予定としては、テドウ登山道から波上坑口まで道を作るだけに留めるものとした。里井氏が、なるべく現状ままの痕跡を観たがっていると聞いていたからだ。

朝８時半に出発し、９時より登山開始。10時にピナイ滝上とテドウ山分岐点に着いたが、後々のために参考タイムを計りたい。と、村田氏より提案がありここから先はスピードを落とし、一般人ペースで登山を継続する。分岐点から20分ほどで前回の探索ルート起点に着く。

さて、私としても前回と同じ密林掻き分ける苦労は御免である。そこでまず、既存登山道を地図アプリに記録（※４）する事にした。

記録し始めたところで記録機材であるスマートフォンの電力消費（※５）が気になり始め、駆けるように登山道をゆく。

目的地から遠ざかり始めたのを確認し、記録を止めた。記録区間531m。

最初の約250m は順調に坑口へ接近し、残りはただ遠ざかるのみ。事前に入手した情報との大きな誤差は無いようだ。

進んだ道を戻りながら脇道に適した場所を探ると、坑口に最も接近した辺りで獣道が封鎖されていた。

「封鎖された道に迷い込む登山者はいないだろう。」と考えた私は、これは良い発想だと封鎖のため張られた立入禁止テープをくぐり抜けて、各々用意した鉈やら鎌（※６）を採り出すと枝を払いながら進み始めたが、途端に下りの急斜面にぶつかった。

その場の３人には何とかなる斜面であったが、

「町史研究の権威。里井氏に何かあったら大変やからなぁ。」

村田氏の冗談混じりの意見も後押し、楽に通れなければ連絡路作りの意味がないと踵（きびす）を返し、後から続いてきた村田・高山両氏を登山道まで押し戻す。

〈写真１〉　炭坑跡までの斜面を下る

残念。気を取り直し再度、地図アプリの情報を参考にして方向を定めつつ、林を掻き分けた。傾斜は緩やか、見通しも効く。ここなら良さそうだと道を拓き始めたが、無関係の登山者が迷い込まないよう入口は隠しておいた。

スマートフォンに表示された地図を見ながら先頭を進む。前回発見した坑口を示す地図上の印に現在地を示す矢印がじわじわと近づいてゆく。

ピンク色のビニールリボンを目印に付けながら、小さい沢に沿って進んでいた時、まず石炭を見つけた。黒く藻が生えた砂岩と見分けが難しいが、後ろにいた高山氏に割ってもらうとやはり石炭だった。

次に、瓶がころがっていたので、注意しなが

ら進むと更に小瓶を拾った。

「アンプル瓶だ・・・薬だ。」

何かの写真で見た注射薬の瓶そのもの形状だったが少し大きめだった。

「麻薬の瓶（※７）だったりして。」

高山氏が言う。

その場で地点記録を取り、二つの瓶は安定した木の根元に寝かせておく。とりあえず坑口までたどり着こうと先に進みかけると今度はボタ山である。細かい石炭が積みあがっており、下り斜面に流れ落ちていた。

〈写真２〉薬瓶を発見した辺り

小さい沢をもう少し進むと、今度は初見の坑口らしきものが隣接して２ヵ所あった。少し散らばる石炭片からして坑口だろうが､100年経った今では窪みのある地面としか見えない。

「まだあったんだね。」

私が言うと、

「まだあるはずや、あちこち（坑口を）開けたんやないか（※８）。」

村田氏が返した。

これにより前回発見した坑口の価値が薄れゆく気がしたが、最初にこの坑口を見つけたのでは“坑口らしきもの”という自信の持てない報告になっていただろう。たんなる土砂崩れ痕ではないかと言われればその意見に流されていたかも知れない。約100年経過しても坑口が顔を覗かせている状況は幸運だったと考え直す。

４．散開

その頃からあちらこちらにガラス瓶があったり、石炭が転がっていたりするので、高山・村田両氏はそれぞれ気を取られ隊列は散開した。

私も遺物が気になるが、スマートフォンの電力消費も気掛かりであり、とりあえず連絡路設置の目的を達成しようと先を急ぐ。

小さい沢だが、ピナイサーラの滝に向かう支流と合流する頃には斜面を深くえぐり、岩がゴロゴロ足場が悪い。「慣れていない人には負担が大きいかな。」とも思ったが、この程度はひとつ頑張ってもらう事にする。

坑口付近まで着くと見覚えのある景色になってきたが、肝心の前回発見した坑口が見当たらない。地図上の坑口の周りで現在地を示す矢印が動き回る。

その頃、ちょうど坑口発見時同行していた高山氏が近くにやってきたので、

「坑口がどこか忘れちゃってさぁ。」

と話すと、

「こっちです、ココ。」

と山の斜面を指し示す。

探しながら通過した地点の山側だった。少し頭を上げれば気が付いただろうに坑口の前を素通りしていた。

地図の記録ばかりを重視し、現場状況の記憶を疎かにしていた点を反省しつつ、坑口付近に目印をつけ、少し道を整えながら途中の目印も強化した。

ここで今日の目的は達成である。

私としては早く下山し、伊武田崎付近の炭鉱事務所跡（※９）を探索する時間があればと、考えていた。

だが、あとの二人の興味は止まず。高山氏は周辺を探索、村田氏は持参の巻き尺で坑口の計測を始める。

「調査は次回、専門家が来るだろうに(※10)。」と、思いつつも村田氏の調査が終わるのを待つ。

ただ待つのも暇なので連絡路を整備しつつ、しばらくして様子を伺いに戻ると忽然と村田氏が消えている。

「もしや坑口に入ってしまったのでは。」と、

一瞬冷や汗をかいたが、

「おーい。」

と呼びかけると少し奥のほうから、坑口のようなものがあると返事が返ってきた。

またしばらくすると、奥から「バッサ、バッサ」と鉈で切り拓く音が聞こえてくるが、これはまずい。

「道みたいなのが、あるぞ！」

と報告してくるが、現場保存の件はどうなるのかと心配で、ストップさせる。それにどれも最初の探索時に発見済みのものである。

「切通しは、どこにあるんか。儂はあれを見たい。」

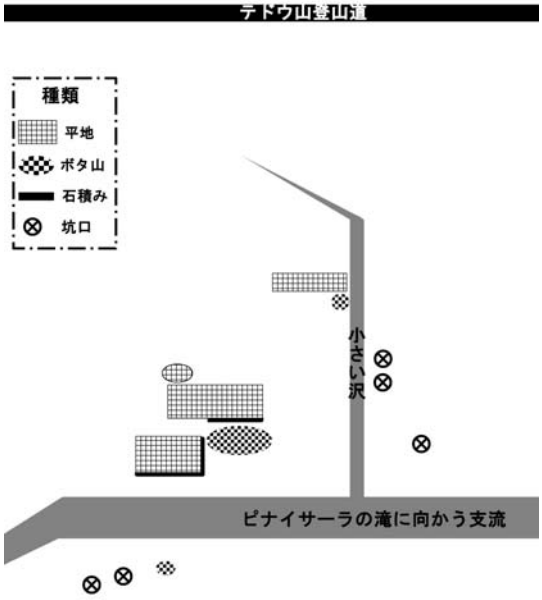
発見の遅れを取り戻さんとする村田氏を止め。

とりあえず高山氏との合流を計り、造った道を戻る。

5．上流へ

道の整備に戻っていた高山氏と合流できた。横を流れる支流に対する上流奥地をまだ見ていないというので三人共々そちらへ向かう。

途中、ボタ山の大きいのがある。高さ３ｍぐらい。石炭屑の山には植物が生育し難いのか細い木ばかり生える中、唯一樹勢のある樹木ガジュマルが根を張り巡らせてボタ山を縄張りとしている。



〈図３〉今回調査した炭坑跡図

ボタ山から転がり落ちたのか、それとも選炭（※11）途中だったのか、近くにはずいぶんと大きな石炭が散乱していた。これほど立派な石炭は他所で見たことがない。

〈写真３〉ボタ山前に石炭がゴロゴロ

近い場所で、円筒状のコップのような物を見つける。銅製あるいはその合金だと思われ、“カンテラ”つまり採掘時に使うランプの一部分ではないかと推測した。

〈写真４〉石積みの平坦地

ボタ山を通り過ぎ、前方に目を向けると、

「石積みだッ！」

先を見ると、石積みによって成り立つ平地が見えてきた。

「大発見やー！」

ここぞとばかりにこの台詞を発する。

「そうそう、これぐらい人為的なものが欲しかった。」

先ほどの大きなボタ山と併せると、確実に炭坑がそれなりの規模で活動していた証しとなる

だろう。石積みの上の平地には、瓶が転がり、陶製の甕が逆さまに埋没し底だけが露出している。

“DAINIPPON BREWERY”“大日本麥酒株式會社”“ダイヤモンド印（※12)”“三ツ矢サイダー”各種の瓶があっちに数本、こっちに一本という具合に点在する。ビール瓶の底には大体12、13、14,辺りの数字（※13）が打ってある。

少し奥には、“ANCHOR BRAND SOURCE”。現在のイカリソースの小瓶もあった。

〈写真５〉多くの瓶がごろごろ転がっている

他の遺物を探しつつ、奥に入ると石積みからなる２段目の平地があった。

現場をあまり荒らさぬように注意しつつ奥に行くと、少し狭いが３段目の平地がある。ここには石積みは無い。

しばらく３人で周囲を探索し、高山氏は今回もカメラ片手に撮影記録係に励む。

あちらこちら歩き回っていると、

「オッ」

足元にようやく原型を留める鍬の鉄部(※14)が在った。危うく踏んでしまうところだった。

「よく見つけましたね。」

高山氏が言う。

最も見つけ難い遺物だったということか。これ以降新たな発見は無くなったので、支流の瀬で昼食を摂ることにした。

昼食中、

「トイレと風呂場はどうしたんやろなぁ。」

「ビール瓶はなんで一ヶ所に積んで置かんのや。」

村田氏が弁当突きつつ疑問点を披露するが、正解を知る者はとうの昔に亡くなっているだろう。

謎が増えるばかりで、解決の糸口が見えないなか想像を言いつつ昼食を食べる。

〈写真６〉昼食時間

昼食後。のんびりと休憩し、高山氏は対岸に“蘭の花”を見つけたと言って写真を撮る。

休憩中に対岸の山を眺めていると、どうも平地になっている。何かありそうだと思ったのは私だけではなく、高山氏も合わせ対岸の下流側を探す。

「何かありますかー。」

と、聞かれ、

「イノシシの跡は凄いけども・・・」

と、答える。

少し見て回るもイノシシが地面を掘り返した痕跡ばかり。また蔓が多く絡まるのが嫌になり支流の瀬に戻った。

戻って見ると、村田氏が居ない。

私よりは粘ったが収穫なく戻ってきた高山氏に、

「戻ってきたら、居なくなってた。」

と話す。

「オーイ。」

高山氏の呼び掛けに対岸上流側の奥より、

「何かあるぞー。」

と、返事が来た

そこで今度は対岸上流側を高山氏と登る。

そこにも小さい沢があり、先ほどは気がつかなかったが随分と手前まで石炭片が流れ落ちて

いる。

これは期待できると、上へ上へ登る。

平地ではなかったが、緩やかな斜面に坑口のようなものが一つ、二つ。

斜面途中には小さいボタ山ができていた。

村田氏と合流すると、目印付けつつ支流の瀬まで戻り、下山することにした。

６．炭坑ハイウェイ

下山と共に、

「切通しが見たい。」との村田氏の希望を叶えるべく目標として進むが、今度は“手付かずの状態を見たい。”との里井氏の希望と喧嘩する。

困ったもんだが、とりあえず手前の道だけでも手を付けずに居ようと、当初は尾根の谷間を流れる支流川際を進んだ。

最初は川を下る余裕すらあったが、次第に傾斜を増す谷に追い立てられ、どんどん山側を登ることになり、

「もう（炭坑の）道に出てしまうなぁ。」

と、話していたらその道に飛び出した。

なるべく努力はしたと自分を慰めつつその道を進むが、「バッサ、バッサ」と村田氏の鉈を振るう音に里井氏への申し訳なさが募る。その頃見つけたビニールゴミ（※15）も相まって、気分は落ち込む。ビニールが存在するということは、割と最近までこの道を通った人がいるのだろう。100年間未踏の炭坑は言い過ぎであった訳だ。

尾根沿いの道の大部分は保存できた証拠に、道に出て間もなく尾根先にある切通しに着いた。

ここにきて、

「この程度（の切通し）なら他の山でも見たことある。」

との村田氏の発言に更にガッカリする。

〈写真７〉途中の切り通し

まあ良い。問題はその先だと考えつつスマートフォンの電源を入れ、再度地図アプリの出番となる。

事前、地図アプリには大正期の地図に書き込まれた登山道情報を移してあり、それを参考に切通し部分からピナイ滝付近までの道筋を解明する心積もりで用意があった。

早速進もうとするが、

「こっちの方が道じゃないか？」

と、村田氏は最初から予想進路を逆行する。

私はとりあえず、スマートフォンに表示される地図を参考にしながら進むが道は見つからず。

少し経つと、

「たしかに道がある。」

と高山氏を経由して情報が来たので、村田氏発見の谷を迂回するように一部逆行する道を進む。

そこから先は快速だった。

村田氏が道を探しながら進み、後に進む二人で道を拡げる。

「(村田氏は)一番気持ち良い仕事してるね。」

私と高山氏で会話した。

森に埋もれつつあったが、まだまだ道らしさを保つそれを探しながら先を進む。その謎解きを楽しむかのような山行は爽快だろう。それを体現するように70代の歳を感じさせぬ俊足だった。

村田氏の足跡を後の二人で拡張しつつ、村田氏を追う。

度々、土砂崩れで道が途絶えた箇所で先頭の歩みは止まり、追いついた二人も合わせて続きの道を探す。出だしは不調だった地図アプリの情報もここでは役立ち、進むべき方向を提示することが出来た。

また、尾根を切通した道も合計３ヶ所在り。そういった遺構は合流地点となり、高山氏がカメラに収め、村田氏も巻き尺で計測し記録していた。

実に気持ちのいい道である。足を持ち上げ越えるような段差も基本なく、山側の垂直に近い法面を左手に進む。

用意した古地図に記された登山道を踏襲するその道程は、私の事前作業（※16）が割と正確であったことを証明し、密かな励みとなった。

直線部分に差し掛かれば、

「高速道路みたいですね。」

と言う高山氏に、

「そうだね。炭坑ハイウェイだね。」

と返した。

さながら山中の高速道路であったが、行けども行けども綺麗な道が残るのを見ていると、沸々。この立派な道をジャングルに埋没させた過去の人々に対し腹立たしく思えてきた。

「なんでだろうね。何でこの道を捨てたんだろうね。」

「あんな下らないテドウへの（現在の登山）道は残して。」

後半はそればかりを私は声にした。

７．謎の穴

地図アプリの表示する矢印は、ピナイ滝が目前であることを示していたが、そこに来て最大の迷走が始まった。

まず、山に向かうか。崖に沿うか。迷う場所だった。山に向かう道らしきものには古いビニールリボンの目印が続く。

だがスマートフォンの地図アプリを参考にすると、どちらかといえば崖に沿う方向であった。

少し崖に沿って進むと道らしい気がするので、そちらに進むがたちまち道の環境が悪化する。戻ろうにも先を行く村田氏の姿が見えない。

どうしようかと高山氏と二人。付近に道らしいもの、せめて楽に帰還できる道がないかと探す。

少し先を行った高山氏と、奥の村田氏とに連絡がとれたようで、「道がある」と言う村田氏の報告を頼りに進むが、急変する山のハイウェイから獣道へのランクダウンに疑心溢れる事この上ない。

だが、今は獣道とはいえ元は人が作った道であるようだ。崖を削るようにできた道を進むと、擦れ違いのためか一人分程度の窪みが崖に掘られていた。

とは言え、明らかに先刻とは雰囲気が一変した道を進む。気づけば、古地図のルートを大きく外れている。

「仮設で作った道が残っただけじゃないの？」

と、変わらず疑いつつも、これがために道が使われなくなったとすれば説明は付くと考えた頃、

「うわぁ、蜂。蜂。」

と高山氏が他に逃げ場のない断崖の道を後退してきた。

「あれっ、こんな時期にも（蜂が）居るの？（※17）」

と驚きつつ、様子を伺う。先に行った村田氏は気が付かなかったようだが、高山氏が通過しようとすると２～３匹出て来たそうな。

なるべく、外側に避けながら静かに進み、ふらふらと出てきたスズメバチ１匹をやり過ごしつつ通過した二人。村田氏を追う。

村田氏は大きな洞穴のような場所で待っていた。

だが困った。こんなに大きな人工的な加工があると、この獣道まがいの道も重要視しなければならないだろう。

「ただの獣道程度」の予想が崩れるが、事実存在するのだから仕方ない。

崖の斜面ギリギリを歩き続けた３人は、10人

程は収まるその穴で休憩を摂る。

高山氏はカメラを取り出し、その穴を撮影した。

その穴が何のために掘られたのか。３人で想像するが、石炭の試掘にしては標高が低い（※18)。謎の穴と言うほかない。

〈写真８〉謎の穴

休憩を終え、歩き始めたらポンッと普段観光客が往来する道に出る。なんとも唐突な終点だった。

「どこに出るか気になってた、ここに出るとはなぁ。」

村田氏が言う。

私はしばし、狐・・いや、ヤマネコか？につままれたような気分でいたが、古地図の登山道は海まで続いている事を思い返し、なるべくその道を踏査することを心掛け、現在の登山道とは異なる地点を進む。

高山氏も共に古い道を捜索してくれたが、古地図の情報を参考に少し遡っては探し、進んでは探し。どちらを見るも道が有るような無いような悩ましい状態であり、時刻も午後４時近く。日暮れも近いということで帰還を優先した。

帰りを急ぐ３人ではあったが、道中も会話の中心は“波上炭坑”であった。

石炭の運搬は人力なのか？せめて牛に運ばせる手段もある。また、この日見つけた道ならトロッコ軌道が張れる。

下山途中に村田氏の携帯電話が鳴った。

この日撮影した写真を添え、さっそく高山氏が報告していたようで、受け取った里井氏からの連絡だった。喜んでくれているようでなにより。

８．薬瓶

〈写真９〉薬瓶

家に戻り、何となく気になっていた薬瓶の薬名をインターネットで調べてみた。

半日経過し、おぼろげとなった記憶を頼りにそれらしき言葉を検索してみれば、

“プロミン”という単語に伴い、ハンセン病・マラリヤ治療薬と説明があった。

「マラリヤ治療薬！」

当時の炭鉱経営の安定化にはマラリヤ対策は必須であるのは承知の事。それに合致する薬品の登場に歓喜した私は、勢い高山氏にもそのことを連絡した。

「マラリヤ治療薬って説明が出たんだよ！…あっ、分かったのはそれだけですが。」

家に帰り一息ついた所であろう高山氏に中身の薄い電話をしただけで恐縮だったが、それでも翌日の朝には、二人分の労力で“プロミン”について調べた結果を比較する事が出来た。

だが、良い内容ではない。

どう見積もっても、大正10年から昭和５年（※19）の操業期間には間に合わない薬なのだ。

薬品については、高山氏の調べが先行しており、それも含めまとめると以下。

1．国産品は1946年、早くても1945年中頃。初期に存在するのは、旧東京帝国大学医学部薬学科の石館守三による試薬程度である事。
2．瓶底のマークが旧東京帝国大学の校章に類似している事。
3．1949年には量産品「プロトミン注射薬」が販売され、薬品名“プロミン”での流通は３～４年間程度と考えられる事。

私の方は、薬品自体についての調べは遅れたが、その瓶の存在理由について調べつつ、いくつかの仮定を考えていた。

1．戦後の医薬品運搬時の紛失あるいは投棄説
2．ハンセン病患者隔離施設説
3．旧東大南方自然科学研究所の調査班持参説

ここまで文面を割いたが、もちろんどの仮定にも証拠となる資料の発見は無い。

１については、ハンセン病患者は宮古島にある療養所に移送後治療を受けた可能性が高い。また、テドウ山越えで移動する理由がない。昔から沿岸集落伝いの移動が基本である。

２については、旧登山道が封鎖された理由にも通じるため理想的な仮定だが、１も含め時代が合わない。英文表記であれば良かったが、当時米軍統治下の沖縄の離島に日本語表記の薬瓶が捨てられる状況は尚更困難。

３について、そのような調査があった証拠がないのはもちろん。当時の戦況から推理して1944年には試薬が完成して欲しいところ。

他には、帝国大学つながりで台湾大学に流れたものが西表島に入った説も仮定し、調べたが根拠は無し。

竹富町史編集係の米盛恭子氏からは、1964年のハンセン病完治者を計画的に西表島に移住させる案に対し、反対意見多数という当時の新聞資料と共に、炭鉱跡地に密かに入植していたのでは？という案もいただいたが、解決に通じるものでは無かった。

「存在が謎ですね。」

高山氏がこう述べたが、私としてもそれに終始する問題であった。

突然、議論の中心となった“プロミン”だが、そんなことになるとは夢想もしなかった我々は薬瓶の現物を山中に放置したままである。また、ガラスの凹凸を写真に収めるのは難しい。確認できるいくつかの写真は、文字の判別が困難であった。

その後、“プリミン”にも読める気がするという意見が高山氏から寄せられ、里井氏からの一文字違いでも同一薬品名として扱っても良いと思うとの意見に、私と高山氏は「薬品名に誤植は許されるのか？」という思いが強かった。

色々と話したが、「現物をしっかり確認してから調査を進めたほうが良いのでは。」と言うことになり、それについてはひとまず留め置かれることになった。

９．結びにかえて

こうして、今回の再訪と連絡路設置の目的は達成したわけであるが、予期せず新たな発見と謎の収集行ともなった。

特に連絡路伐開中に見つけた“薬瓶”はしばらく興味の中心となり、今すぐにでも確認のため山に戻りたいところだが、次の調査まで時間が掛かりそうな状況であるので、その点も含めた報告はまた別の機会に披歴できればと思う。

【注記】

※１　里井洋一／琉球大学名誉教授／竹富町史編集委員会副委員長　炭坑調査の代表者だが、新型感染症の影響により、西表島入りは延期に次ぐ延期で誠に不憫。発見の楽しみを共に分かち合いたいところだが、不在のまま調査は始まった。現場での活動は無かったが、炭坑関連資料の収集と文化財登録に向けて頑張っている。

※２　村田行／自然ガイド業／大阪出身。　47年間西表島在住し、イリオモテヤマネコ等の保護にあたる。１回目の調査時は以前石炭を発見した河原を重点的に探索し、今回は奥の坑口・

炭坑時代の道を踏査した。調査メンバーの中では最高齢。最もアグレッシブに、長年謎だった炭坑の解明を楽しんでいる。

※３　高山雄介／認定ＮＰＯ法人トラ・ゾウ保護基金西表島支部　事務局長／西表島在住。
情報収集だけでなく伐採もこなせる有難い人材であり、今回もお世話になった。テドウ登山ルートの情報提供が無ければ、もっと重労働な作業になっていただろう。

※４　地図アプリに記録　前回同様に「ジオグラフィカ(Geographica)」という電子地図アプリケーションを使用したが、今回はその機能の一つである“ロガー機能”を利用した。これにより自身が歩いた道程を地図上に記録する事ができる。前回記録した坑口の場所も地図上に表示され、10m 程度の誤差で辿り着くことが出来た。

※５　スマートフォンの電力消費　特に今回利用した“ロガー機能”は人工衛星の電波を受信し続けるため電力を消耗しやすいと言われている。だが、結局のところ一日使い続けても電力に余裕があることが解ってきたため、この日以降消費電力を気にする事は無くなった。

※６　鉈やら鎌　個性が出るので面白い。村田氏は刃先の角ばった大きな営林鉈、高山氏は刃先に石突きのある鉈を「引っ掛ける事が出来るから」と言って使っている。又、石突きで石を割り石炭を見分けるのに使っていた。私は、一尺半ぐらいの柄がついた手首位の木まで伐れる鉈鎌を使って居り、特にアダン葉で手を傷つける事がないので重宝している。

※７　麻薬の瓶　西表島の炭坑について調べていると、“台湾人鉱夫は麻薬を使う。”という話がよく出てくる。そして波上炭鉱は台湾人が経営していたとされる炭坑であり、連想するのも無理はないが麻薬が使われたという証拠は未だ見つかっていない。

※８　あちこち（坑口を）開けたんやないか
西表島の石炭層の特徴として、ただでさえ薄い炭層が断層によって細かく上下に分断されている。よって西表島の採炭では分断された炭層毎に坑口を造る必要があり、必然的に坑口の数は多くなる。

※９　伊武田崎付近の炭鉱事務所跡　大正期の地図を見ると、伊武田崎付近に建物が記載されている。又、大正12年頃作詞された《西表島一周旅行の歌》の歌詞に“事務所に留守番が唯一人”というのが有り、その点から言って地図に描かれた建物は炭坑会社の事務所であると私は考えている。

※10　専門家が来るだろうに　素人が調べても仕方ないだろうと。その頃、里井さんは勿論、地質学の先生や西表島の炭坑史で有名な三木健さんも来るらしいという話があった。

※11　選炭　その字の如く、商品価値の高い石炭と悪い石炭を選り分け、悪い石炭は積まれて山になる。これがボタ山と言われる。西表島は手選。つまり人力に依る選炭以外を私は聞いたことが無い。波上坑でも同様であったと推察される。

※12　ダイアモンド印　DAINIPPON BREWERY と大日本麥酒株式會社は同じ。戦後“アサヒビール”の朝日麦酒と“サッポロビール”の日本麦酒に分割。そしてダイアモンド印は兵庫県の布引礦泉所が作るサイダーであり、今も生産されている。

※13　大体12、13、14, 辺りの数字　特にビール瓶の底には確実に数字が刻印されている。炭坑の操業時期から言って大正12、13、14年を示すと考えられる。この特徴は年代の特定にとても役立っている。

※14　鍬の鉄部　炭坑跡にもかかわらず見つけたのはツルハシではなく、よく観察してもクワ

にしか見えない。どのような用途のために用意したのかは不明。

※15　ビニールゴミ　劣化の進んだ黒いゴミ袋。少し調べてみると、黒いゴミ袋は2000年以降の流通が減少している。またポリ製ゴミ袋の利用は1970年代以降のこと。その間の期間ということになるが誰が捨てたのか。ともかく炭坑に興味がなかったのか？

※16　事前作業　大正時代の地図と現代の地図を重ねて位置を割り出すのだが、古い地図と新しい地図のズレをどう上手くまとめるのかに苦労する。半ば諦めていたのだが結果は上々だった。

※17　こんな時期にも（蜂が）居るの？　西表島で蜂が活動する期間は、例年５月～10月位と考えていたが12月にも拘らず蜂がいた。村田氏いわく死んだ巣に生き残りが少し居ただけだろう、との事。

※18　石炭の試掘にしては標高が低い　坑口が多く見つかっているのは標高210～220m付近に対し、この謎の穴の標高は約150m。もちろん石炭層の露出は無く、奥行き約７ｍで掘削は止まっている。

※19　大正10年から昭和５年　波上炭鉱の石炭試掘の申請と許可が下りている期間。

安里　淳

1993年（平成５年）生まれ。西表島上原出身。

現在、炭坑調査過去５回のうち３回分を書いているところなのだが、夏の暑さが到来し、暑さに負けて執筆速度も低下。記憶を遡る期間が伸び、余計に進まない悪循環に嵌るこの頃ですが、第二弾の調査記録をまとめることが出来た事は一安心。（※令和４年９月頃の話です。）

町史だより　49号

PDF

↑　坑跡発見までを記録した「波上炭坑探索記」は、『竹富町史だより』〈第49号〉に掲載されています。上記 QR コードよりアクセスできます。

〈資料紹介〉

大原公民館会務表

大原集落は西表島南東部の仲間川南に広がる集落。1938（昭和13）年、沖縄県振興計画による自作農創設の目的に、新城島の17戸が南風見村跡に入植してできた集落である。アジア・太平洋戦争中は、新城島の人々の避難地でもあった。1941（同16）年には、沖縄県営開墾事業計画により、再び新城下地島からの移住があり、南風見部落を建設したが、戦後の合流を契機に「大原」と改称された。現在、仲間港と石垣港との間に定期航路が開かれ、西表島東部の中心地的な役割を果たしている。

地域の自治組織である大原公民館は、1949年（同24）以降の会務や活動を中心に記録した「会務書」、または「会務表」を保存・継承している。これらのうち、本号では1962年（同37）の「会務表」を収録することにする。翻刻にあたっては、誤字と思われる記述も、原則として原文に即して行なったことをあらかじめ断っておく。

「会務表」は、1962年４月17日から1963年（同38）５月までの事柄が、「月日」ごとに立項され（「同月」も１項目とみなす）、日々の会務を簡潔な表現で示している。例えば、４月は次の７項目が記されている。

「会務綴」（1955年度以下）
（提供　大原公民館）

四月十七日　書類引続ぐ
四月十八日　福祉事ム課長戸口氏外三名来島
同　　日　　米軍演習部隊より招待さる
四月廿三日　松苗木移植作業実施
四月廿四日　米軍演習部隊より映画提供
四月廿四日　統計局より東部地区状況調査のため比嘉氏来島懇談す（幹部のみ）
四月廿六日　中間苗甫調査のため豊川氏来島懇談す（幹部のみ）

以下、５月は20項目、６月は21項目、７月は14項目、８月は16項目、９月は14項目、10月は10項目、11月は７項目、12月は７項目、1963年１月は５項目、２月は13項目、３月は12項目、４月は７項目、５月は１項目で、合計147の記事がみられる。

さて、1962年度、大原公民館の公民館長は黒島宏氏、副館長は鳩間清基氏である。当時は高度成長期にあった日本に対して、沖縄はアメリカの施政権下にあった。八重山でもこの時期を復興期と称することがあるが、「会務表」からは、道路や電気施設の整備など、生活基盤を整えつつある様子がうかがえる。また、親島である新城島の伝統行事も大原の地で行なわれていること、修学旅行の受け入れや米軍演習部隊との折衝などの記録も見受けられる。このように「会務表」は、大原公民館を中心とした地域の具体的な活動が理解できると同時に、八重山における貴重な歴史資料としての性格も有している。

ところで、「農山漁村電気導入促進法」（1952年法律第358号）の導入後、地域の粘り強い陳情が効

を奏し、電気事業を完成させたことは、住民にとって大きな喜びであった。「会務表」の記述に当時の新聞記事を重ね合わせることによって、当時の状況がより鮮明となる。ここでは1962年の新聞記事から見出しを拾って、経緯を確認するに留めておくことにする。

１月28日　「大原の電気問題」『八重山タイムス』
４月10日　「農山漁村電気導入促進法　大原、大富、豊原　三部落に適用」『八重山毎日新聞』
６月22日　「大原、豊原、大富　来月早々三部落に送電」『八重山タイムス』
６月22日　「西表に輝く米琉親善の灯」『八重山タイムス』
７月７日　「大原、大富、豊原部落　送電を待つばかり」『八重山タイムス』
10月13日　「西表東部に文化の光」『八重山毎日新聞』
10月14日　「東部西表電化」『八重山タイムス』
10月15日　「明日大原で合同祝賀　電気、診療所落成など」『八重山朝日新聞』
10月17日　「電化に胸一杯　東部西表に喜びの色―晴れの式典に郡民多数列席―」『八重山タイムス』

そして、10月16日の祝賀会は、大原公民館四大事業（大原地区発電所送電式、ならびに大原診療所、大原巡査駐在所、大原中学校教室の落成）の完遂を祝した合同祝賀会のかたちで執り行われた。プログラムには「部落対抗祝賀のど自慢大会」も催され盛会だったようである（『八重山タイムス』10月17日付）。

電気事業の経緯のほかにも、「会務表」をテキストとして、新聞記事や証言を重ね合わせることによって、当時の状況を立体的に浮き上がらせることが可能になることだろう。

大原公民館から、貴重な資料を提供していただいた。ここに記して感謝の意を表する次第である。今後も『竹富町史だより』で、注記を施し、記述に応じた写真を添えながら、大原公民館の「会務書」「会務表」を紹介していく計画である。

参考文献

・『沖縄大百科事典』〈全巻〉（沖縄タイムス社、1983年）
・『栄光永えに―大原創立五十五周年記念誌―』（大原創立五十五周年記念誌作成委員会、2001年）
・『竹富町史　第十一巻　新聞集成Ⅵ』（竹富町、2004年）
・川平成雄・松田賀孝・新木順子『戦後沖縄生活史事典　1945－1972』（吉川弘文館、2022年）

一九六二年度 会務表

四月十七日　書類引続ぐ
四月十八日　福祉事ム課長戸口氏外三名来島
同　　日　米軍演習部隊より招待さる
四月廿三日　松苗木移植作業実施
四月廿四日　米軍演習部隊より映画提供

四月廿四日　　統計局より東部地区状況調査のため比嘉氏来島懇談す（幹部のみ）
四月廿六日　　中間苗甫調査のため豊川氏来島懇談す（幹部のみ）
五月一日　　新年度予算打合せなす
同　　日　　大浜中学生、並び建運局高吉氏、駐在所請負者粟蔵氏一行来島
五月三日　　排水溝の草刈り作業実施
同　　日　　チリ捨て場指定す
五月四日　　春季清掃検査実施
五月五日　　子供の日部落児童生徒へ贈物をなす
五月十日　　部落予算案並び計画案作成なす
五月十一日　　年度始りの定期総会開催
五月十三日　　古見校に於いて、米軍演習部隊並び東部青年会の親善陸上競技大会開催同日母の日
五月十四日　　官有地の件、打合せ出席者横目熊彌、西大舛高一、花原安祐、黒島宏、鳩間清基
五月十四日　　営林署長又吉氏並び台湾省農林技手珍氏外三名来島午後八時より農事懇談会開催同日獣医多宇氏来島
五月十七日　　竹富、川平中学生一行来島
五月十九日　　小児マヒ予防注射実施さる　同日赤ちゃんコンクール入賞白保英明ちゃんへ祝電打つ
五月廿二日　　農協よりヤソ駆除指導のため新盛氏来島
五月廿三日　　ヤソ駆除実施
五月廿五日　　地方庁林の課より琉球松植付け調査のため黒島氏来島
五月廿六日　　松苗補植作業実施検査受く
五月廿七日　　東部青年会陸上競技大会開催
同　　日　　電気設立委員会開催
五月廿八日　　所得調査のため島仲氏来島
六月一日　　ヤツサ島耕地再測量陳情文作成
六月二日　　古見部落水道資金交付のため弁ム官代理ゼイコプス氏一行来島
六月四日　　ヤツサ島再測量陳情文提出
六月五日　　具志川村議員一行来島
六月六日　　具志川村議員一行東部視察案内す
六月十一日　　桟橋道路補修作業実施
同　　日　　ヤソ駆除実施
六月十二日　　電機資材到着陸揚げ作業実施
六月十三日　　部落会則改正案作成
六月十四日　　電機資材陸揚げ
六月十五日　　耕地事ム所与那覇氏来島（農耕地護岸調査のため）
同　　日　　大浜伊志屋氏死去（青年会でお通夜）
六月十六日　　大浜伊志屋氏葬儀なす
六月十九日　　一九六一年度公民館活動状況報告書作成
六月廿日　　前日と同じ
六月廿一日　　電気施設資金交付のため弁ム官代理ゼイコブス氏、東地方庁長、崎田町長来島さる
六月廿三日　　法務局八重山支局、登記所より田場氏ヤツサ島調査のため来島
六月廿四日　　田場氏同伴でヤツサ島視察
六月廿六日　　獣医多宇氏来島

六月廿九日　東部出張所職員として東盛幸英氏来島
六月三十日　出張所開所式挙行のため総務課長並び花城氏来島
七月一日　町役所東部出張所開所式挙行す
七月四日　米国独立記念日八重山民政府ゼイコブス中佐より招待を受けパーテーに参加す
七月十四日　部落臨時総会開催会則改正案審議修正可決
七月十六日　ヤツサ島残余地払下げのため財務課長来島、入札日延期させる
七月十七日　ヤツサ島残余地払下げの件で、横目熊彌、西大舛高一、大舛久起、安里真三、黒島宏懇談なす
七月十八日　部落臨時総会開催（ヤツサ島残余地の問題）
七月十九日　土地払下げ交渉のため、代表者西大舛高一、安里正一、大舛久起、南風見秀次、黒島宏、出張す
七月廿四日　電気工事検査のため山之端氏、比嘉氏来島
七月廿五日　豊年祭予算取〆
七月廿六日　豊年祭挙行す
七月廿七日　国際的マラリヤ研究指道のためアメリカ二世中田氏、並び台湾省陳萬益氏一行来島
同　　日　電気、送電開始さる
七月廿八日　竹青協陸上競技大会開催（於中学校）
七月三十日　伊江島村長区長一行当地区視察のため来島
八月二日　伊江島の視察団一行仲間川上流へ案内す
八月七日　台風被害調査報告をなす
同　　日　ヤツサ耕地再測量の件、地主集会懇談なす
八月八日　ヤツサ耕地再測量技術者金城氏外三名来島
八月九日　ヤツサ耕地測量開始
八月十三日　九洲医科大学生来島、検便並び採血検査実施さる　同日琉大生岸本氏外一名来島
同　　日　電気設立委員会開催
八月十四日　旧オ盆、獅子舞なす
八月十五日　道路補修、日中作業実施
同　　日　ヤツサ耕地の支線道路、及測量に要する経費の打合せ決定をなす
八月廿二日　コレラ予防接種実施なさる
八月廿四日　ヤツサ再測量終了す
八月廿七日　コレラ予防接種実施
八月廿八日　弁ム官代理ゼイコブス氏軍医少佐ホルマー氏コレラ予防対策懇談のため来島
同　　日　公民館屋根修理漆喰塗り実施
八月三十日　節祭挙行す
九月四日　公民館修理雨戸入れ替え実施
九月五日　コレラ予防接種実施
九月六日　部落臨時総会開催
九月九日　町議会議員選挙施行

九月十三日　　文化会館より映画、亀川氏、仲地氏来島
九月十四日　　農協組合長来島懇談会開催
九月十五日　　老人の日敬老慰安会開催
九月十八日　　臨時清掃検査実施
九月十九日　　臨時総会開催
九月廿三日　　結願祭取り〆総動員
九月廿四日　　結願祭挙行す
九月廿八日　　弁ム官来島されるに付き連合会役員並び電気委員会開催懇談なす
同　　日　　福祉事ム所長安谷屋氏並び課長来島
九月三十日　　高等弁ム官以下二五名学校へ図書及び実検器具贈呈のため来島
十月一日　　飛行場草刈作業実施同日小学校裏通用道路作業開始
十月八日　　電気施設落成祝賀会打合せのため委員会開催
十月十日　　秋季清掃検査実施
十月十三日　　児童運動会挙行
十月十四日　　電気祝賀会準備
十月十五日　　中島アナウンサー一行並び展示会のため石垣用命氏来島
十月十六日　　電気施設落成祝賀会挙行
十月廿三日　　小学校裏通用路並びすべり台、低学年用機械棒完成
十月廿四日　　パイン貝ガラ虫駆除のため普及員入波平氏来島
十月廿八日　　評議員会開催（電気運営委員決定）
十一月二日　　製糖工場水道應援作業開始
十一月九日　　立法院議員選挙施行
十一月六日　　連合会、電気委員会開催（祝賀会並電気設立収支決算報告）
十一月十一日　臨時総会開催（電気施設各自負担割当）
同　　日　　舟浮義夫氏の送別会（連合会役員のみ）
十一月廿日　　弁ム官代理ゼイコブス氏離任挨拶のため来島
十一月廿四日　電気料金徴集について評議員会開催
十二月九日　　営林署大原担当区玉城氏觀迎会開催（連合役員のみ）
十二月十一日　大石先生留任お願ひのため連合役員会開催
十二月十二日　排水溝コンクリ打ち作業開始
十二月十四日　派遣医配置方陳情書提出
同　　日　　桑江氏へ感謝状贈呈す
十二月十五日　沖縄気象台より許田氏来島
十二月廿五日　大石先生送別会開催

六三年

一月三日　　大石先生見送り
一月八日　　舟浮武一郎氏死亡、葬儀なす

一月十五日　成人の日祝賀会開催
一月二十三日　仲間川右岸調査並び測量のため野波氏外十名来島
一月三十日　統計局、喜名氏外一名来島
二月十日　宮良長番氏死亡に依り葬儀なす
二月三日　製糖工場仲田社長と懇談（連合会幹部のみ）
二月五日　コレラ予防接種実施
二月十三日　米軍キンジヤオン大尉以下四名演習地視察のため来島　高那方面視察後ヤツサ橋の件、現場説明なす
二月十四日　高等弁ム官来島されるに付連合会開催、建運局より測量団一行五名来島
二月十五日　弁ム官一行二二名民状視察のため来島　要望事項提出
同　日　電気委員会開催
二月十九日　みどりの羽根募金運動督励す
同　日　電気の負担金及其の他事ム打合せなす
二月二十日　耕地事ム所長内間氏来島
二月二十二日　評議員会開催（予算の件）
二月二十四日　立法院議員来島に付陳情文作製
二月二十七日　立法院議員へ陳情書提出
三月一日　弁ム官代理ギヤロウエイ氏来島　学校へ野球用具贈呈さる
三月二日　信協長安室氏来島　貯蓄懇談会開催
三月三日　東部出張所長東盛幸英氏退職送別会開催
三月四日　弁ム官代理ギヤロウエイ氏夫妻並び桑江氏部落内視察のため来島
三月五日　教育主事慶田盛氏来島
三月八日　教育委員選挙施行
三月十日　福祉事ム課長下地氏外一名来島
三月十二日　診療所看護婦仲嶺氏の送別会開催
三月廿二日　調査医師小林実氏外二名来島
三月廿五日　仲間川右岸測量団一行引揚げる
同　日　公民館修理実施
三月廿七日　臨時総会開催
四月二日　陳情書一部琉球政府林ム課へ提出、農地課及び参事官室訪問土地問題要請す
四月十五日　琉球政府林ム課より長浜氏来島　官有地の件、並び部落実情調査のため
四月廿四日　平良市、並び那覇市議会議員一行視察のため来島
四月廿六日　小児マヒ予防服薬実施
四月廿九日　日本本土より視察団一行並び琉球政府参事局より大嶺氏来島
四月十八日　岸本氏夫妻の送別会実施
四月廿日　岸本氏那覇引揚げ見送りなす
五月一日　年度末総会開催　予算、決算報告承認　役員改選

（町史編集係）

〈増田昭子ノート〉

黒島の「衣」

1．座談会

（1）伝承者

座談会の参加者、および情報提供者は、次の14人（50音順）である。

島仲和子（昭和８年生、東筋）
玉代勢光子（昭和27年生、石垣市在、夫・玉代勢寛泰〈東筋出身〉）
玻座真武（昭和12年生、石垣市在、宮里）
玻座真花子(昭和12年生、石垣市在、宮里)
東船道初江（昭和13年生、東筋）
船道ケイ（昭和11年、東筋）
船道賢範（昭和８年生、東筋）
船道美佐江（昭和30年生、石垣在、夫・船道浩佑〈東筋〉）
船道幸（昭和９年、石垣在、東筋）
前本笑美子（昭和13年生、石垣市在、夫・小浜島出身）
宮良当成（昭和10年生、黒島保里）
宮良トミ（大正11年生、黒島保里）
宮良美紀（昭和28年生、宮良トミの娘）
宮良ミヨ（昭和３年生、黒島保里）

（2）普段着

・着物はキンといった。
・手仕事のことをティーワザといった。
・着るものは正月でないと買ってもらうことができなかった。
・アジア・太平洋戦争中でも男の子の着るものは洋服だった。
・女の子の絣の着物は、反物を買ってきて、仕立ててもらった。
・成人男性の着物は木綿であった。女性は木綿で格子縞などの着物だった。
・着物は古くなったものを仕立て直して着てていた。こうした着物はクーサシといって、何度も継ぎをあてして縫ったものである。あまりにも縫い直したため、布が弱くなってしまい、ゴシゴシ洗うと切れてしまうので、「ちゃんと洗うなよ」と注意された。
・継ぎはぎだらけの着物をムンクリ、クーサピラーといった。この言葉は、穴が空いているのを補う、という意味がある（玻座真武）。
・男は普段、仕事着を着ていたが、下着はサナイ（褌）であった。
・畑で仕事をするときの女性は、膝までの丈の着物を着て、カシガー(穀物などを入れた袋)を腰巻にしていた。
・着るものは自家製よりも、買ったものを着ていた（宮良ミヨ）。

（3）よそ行きの着物

・女性はスディナ・カカンのセットで礼装となる。スディナ（上衣）は、帯を締めず、前で紐を結んでゆったりと着付けする。カカン(下衣）はスカート状、あるいは袴状。
・豊年祭には新しい芭蕉の着物を作ってもらった。
・船道美佐江さん所有の格子縞の絹織物（袖は丸袖）は、夫の母の49日に、形見として譲り受けたものである。このような格子縞の絹織物は、格式の高い家の奥様が着用して、その上にウチャキを羽織ったのだという。

（4）下着

・下着は木綿のサラマタだった（船道賢範）。
・下着は木綿のパンツであった（船道ケイ）。
・女性用の下着をメーヘンといい、六尺褌と同じようなものであった。小便をするときは、メーヘンを横にずらして、しゃがんで用をた

した。東船道初江さんの祖母の時代（明治時代）は、黒い木綿であったと聞いている。次の世代（初江さんの母）は、白い木綿のバッシュ(パッチュとも言った)だった。バッシュはズロースのこと。また、越中褌のような白い下着をサナイと言っていた（船道賢範、船道ケイ)。

・アジア・太平洋戦争前、男も青年になると、木綿の褌をつけた。これをサナイといった(船道賢範、船道ケイ)。

・アジア・太平洋戦争が終わって、男子のあいだで褌が流行った。小学校３、４年生のころ、母親に「褌を作ってくれ」とお願いした。それまで海で泳ぐときは丸裸であったし、普段はズボンをはいていても下着は何も着けなかった（玻座真武)。

（５）子どもの着るもの

・幼少のころ、姉の着物を着せられて、友達からからかわれたことがあった。小学生に上がると、姉の着物を着せられるのが嫌で、着用を拒んだ（玻座真武)。

・６歳のころ（アジア・太平洋戦争直後)、火傷をしそうになったとき、綿を入れたムンクリを着ていたので、大火傷にならないで済んだ。治療には慶田盛医者にかかったが、帯もしないで着流しだったので、すぐに医者がムンクリを脱がせてくれた（前本笑美子)。

・小学校２、３年生までは、学校に行くとき、ズボンをはいていた。しかし、家にいるときは着物だった。

（６）被り物

・男性はサジ（手拭）を被った。その上に蓑笠を付けた。裸に蓑笠を付けて働くと、涼しかった。笠はクバの葉でつくったクバ笠で、蓑もクバの葉を素材としたものである。アジア・太平洋戦争後は、クバ笠を作るよりも、買って使うようになった。

・女性はサジ（手拭）を頭に被り、後ろで結んだ。その上にクバ笠を被った。サジは買ったと思う（宮良ミヨ)。

・一般に、帽子を被ることはなかった。宮良当成さんはアジア・太平洋戦争の直後に、本家の従兄（大正９年生）が帽子を買ってくれたので、その頃被っていたという。

（７）履物

・下駄は浜辺にあるタコナチ（ハスノハギリ）という柔らかい木を切ってきて、それを材料にして作った。宮良ミヨさんによると、流木でも作ったようである。

・畑で仕事をするときは、男性も女性も裸足だった。現在は、畑でも牧場でも長靴を履いている（宮良当成)。

・学校に行くときは裸足だった。遠足では海辺の岩場へも行くので、アダンバゾーリを履いて行った。(宮良ミヨ)。

・運動会のときは、運動会用の靴があった（玻座真花子)。

（８）素材について

・**毛糸**　石垣島から買ってきたか。セーターをほどいて毛糸にしたこともあった。

・**絹**　蚕を飼って、繭から絹糸を取った。絹糸を公民館で換金した。

・**芭蕉**　糸芭蕉を伐ってきて、捌いて、炊いて、細かく裂いて糸にした。

・**人絹**　アジア・太平洋戦争前からあった。パンツなどに用いられたが、紙のように弱く、着けないうちに破れてしまうこともあった。豊年祭のとき、ハーレーの若い男たちが着けていた（船道賢範・ケイ)。

・**クバ**　クバの葉は蓑や笠にした。

・**月桃**　月桃は方言でサミンといった。縄にしたり、ワラジを作ったりして、ソーメンなどと交換した。ワラジは漁業者がよく買った。宮里の売店に作った縄を持参し物々交換し

た。

（９）配給時代の配給衣類
ーアジア・太平洋戦争後ー

・アジア・太平洋戦争後、兵隊の服をイーティー(ＡＴＰＴ)、イーチビーシー(ＨＢＣ)といったが、これらにピクマサ（付け紐）を付けて寝巻や、よそ行きの半コートに作り変えた。
・草色の軍服の払い下げをＡＴＰＴといい､｢アメリカ生地｣であった。これを解いて中学校の制服を作った。左胸の位置に、黒島の頭文字「Ｋ」が刺繍されていた。
・仲本村の宮喜キヨさんは、アメリカ生地をミシンで洋服に仕立て直した。仕立代は大豆であった。
・男物のシャツはメリケン袋を仕立て直したという。学校のテントもメリケン袋を継ぎ足して作った。玻座真花子さんの実家では、メリケン袋で布団カバーを作ったことがあった。
・アメリカ軍の兵隊の服が配給されたが、それを仕立て直して衣類にした。島仲和子さんは黒島で配給になった軍服などをミシンで縫い直し、島の人たちが着る衣類をつくった。さらには、他人の分まで作って商売にしていた。このミシンは現在（2015年）も保管しているという。同様に、宮喜キヨさんもミシンを使って軍服などを作り変えて商売をしていた（島仲和子、船道賢範、船道ケイ）。
・アメリカ軍の配給品は、セーラー服ならジャンバースカートやカバンに作り直した。濃い緑色の軍服は硬くて、パンツや褌にしたら痛く、股ずれになった人もいた（船道賢範、船道ケイ）。
・子守の駄賃がわりに、軍服で正月用の服を作ってもらったことがある。
・宮古島から赴任してきた先生が、ＡＴＰＴの服を作り直して背広にしたことがあった。背広を黒に染めたいが、染料がなく、イカの墨を使って染めた。暑くなって、汗をかいたら、イカ墨が溶けだし、イカの臭いがしてたいへんだった（玻座真武）。
・バスタオルのような柔らかいタオルを「アメリカタオル」と呼んで、これで下着を作ってもらった。

２．取材ノート

（１）宮良冨さんの話

・冨さんは保里生まれ。小学生のころ、父親が奈良県天理市にいたとき、父親がセーラー服を送ってきてくれたことを覚えている。それを着ていると、周囲から「水兵さん」とか、「ハイカラだね」とか言われた。そのセーラー服は、冨さんの妹たちも着用した。
・冨さんの祖母は、畑のそばに糸芭蕉を植えており、それを伐って、大きな鍋で煮て、バショー（芭蕉）の繊維をとった。家には芭蕉が素材の着物がある。
・藍を栽培して、それを染料にした。その藍は近年まで牧場の側にあったが、今はもうなくなってしまった。
・茶色に染めるにはシャリンバイの皮を煎じて染めた。
・着物は母親が縫ってつくった。寒い季節には着物を二枚、三枚と重ね着した。
・冨さんはミシンを持っていて、子どもの洋服を縫うだけでなく、よその子の洋服も縫ってあげていた。娘の美紀さんは、冨さんに作ってもらった着物を着けていたので、買った服を着たことがなかった。冨さんは小学校４年生からウンシン（運針）をしていた。「ウンシンキレ（運針布)」という布があって、それで針仕事の練習をした。
・嫁ぎ先の宮良家は篤農家であったから、反物は石垣島の呉服屋に行って買ってきた。
・赤ん坊が生まれる前に、その子の服を用意してはならない、といわれていた。生後10日ぐ

らいは、古着を着せていた。そうすることでマザムヌ(魔物)を避けたと伝えられている。
・赤ん坊のオシメは、古い浴衣を直して作った。
・家には芭蕉と苧麻を混ぜて織った蚊帳があったが、これも作業着に仕立て直した。
・家にある紋付の着物はもともと、冨さんの里である前底家の祖母・カナシさんが蚕から糸を取って織った柄物だった。それを後年、京染めに出して黒に染め紋付にしたものである。紋は付紋である。

（2）宮良ミヨさんの話

・宮良ミヨさんは昭和３年生。小学校に入学したときの写真は洋服である。ミヨさんは、叔母さんにあたる２人の方が台湾に行っており、彼女らが洋服をはじめ、ワンピースを台湾から送ってくれたことがあったという。正月には、花模様の友禅を送ってくれたこともあった。パンツも台湾のおばさんたちが送ってくれた。

（3）前本笑美子さんの話

・黒島は「食い道楽」、小浜島は「着道楽」、竹富島は「道具道楽」といっていた。
・笑美子さんの兄・当山哲男さんは和装を着用したことがなかった。
・黒島では藍を栽培して、藍染をしなかったが、小浜島ではやっていた。笑美子さんの夫は小浜島の出身で、その母親は明治33年生まれであったが、藍染めをしていた。
・黒島では養蚕をして繭を取り、生糸にして絹織物も織っていた。食料難のときには、絹織物を食べ物と交換した。
・黒島では、繭を麻袋に入れてシックバ（飼育場、共同作業場。後に公民館)に持参したら、石垣島の人がそれを買いに来島していた。
・アジア・太平洋戦争後、笑美子さんの兄嫁が、嫁入りのとき那覇から持ってきた芭蕉の着物がある。模様はバンゾンガネ（大工の曲尺)。その他、芭蕉衣は豊年祭で踊る舞踊「笠踊り」「鎌踊り」などで着用するものがあるが、これらを洋服に仕立て直したものも所有している。
・昔の織物を数点所有しているが、夫の実家（小浜島）から譲り受けた着物も、男物５点、女物７点、反物３点がある。

（4）玉代勢光子さんの話

・手仕事をティーワザといった。
・木綿の素材の着物に四列の絣模様の入った着物がある。光子さんの夫・寛泰さんの母・トユは、運道家から玉代勢家に嫁入りしたが、この着物はこのとき運道家から譲り受けたものである。この着物を着ていた人は、小柄な人であったので、知人に依頼して仕立て直してもらった。現在は、光子さんがコシアテをとって、踊り衣装として用いている。
・芭蕉の反物をブラウスに仕立てた洋服もある。
・石垣島の内原ツルさんが織った着物を所有している。
・光子さんの祖母（首里出身）の芭蕉衣に、絣模様の布地と黒地の布をあてて、ブラウスにしたものがある。

（5）玻座真武さんと花子さんの話

・花子さんは八重山高校を卒業後、沖縄大学（短大）に進学してその２期生となり、家庭科を専攻した。家庭科も免許が必要となった時代であった。沖縄大学の卒業後、石垣中学校の臨時教員に採用され、以後八重山地域の学校で教鞭をとった。
・三女だった花子は、小学校の入学式にセーラー服を着けていた。このセーラー服は長女、次女、三女と着用したものだった。
・台湾帰りの子どもは和装の三つ揃い（着物、羽織、袴）を持っていた。これを学芸会のと

きに借りたこともある。

・花子さんが中学生のころ、家庭科の授業は、音楽教師が兼任していた。この先生にテーブルマナーなども教わった。調理実習では、屋外で三つ石のカマドをつくり、薪を燃やして米を炊き、寿司をつくったことがある。当時、米はクーゴメ（粉米）が入っていた。

・男子中学生は、アメリカ生地で、服も帽子もカバンも作った。

・下着にも変遷があった。アメリカ生地から「アメリカタオル」のパンツ時代があった。中学生のころは、ヒダのあるブルマーだった。高校生になると、ヒダのないショートパンツになった。そのころ先生の肩に、下着の紐が２本あるので、下着を２枚着ていると思ったら、その１本の紐はブラジャーの紐だった。その後、自分もブラジャーを買った。

・生理になったときは、親も教えてくれなかったのでたいへんだった。中学生のときは、布団の綿をズロースにあてたり、晒を裂いてあてたりした。高校生になると、生理バンドがあったので、それを使った。

・雨の日、学校へ行くときは、麻袋を二つに折って被ったが、それでもびしょぬれになった。

・ゲットー（月桃）の繊維で縄をなったり、草鞋を作ったりした。これらを宮里のお店に持っていき、ソーメンなどと物々交換した。草鞋は漁業者がよく買った。

・アダニ（アダン）の木根で、正月に揚げるタコ（凧）の糸を作った。コマもアダニの木根で作った。

・蘇鉄の実を包んでいる綿状のものに、糸を巻いてマリ（毬）を作った。

（2015年２月20日受理）

〈追記〉

本稿は、増田昭子氏の黒島取材ノートのうち、「衣」に関する箇所です。増田氏は2019年に他界されましたが、生前に黒島の「衣」を記録するため、基礎作業として座談会を設け、その後もインタビューによる取材を続けられていました。本稿は、それらを箇条書きにしてまとめられた増田氏の研究ノートです。

この〈増田昭子ノート〉を『竹富町史　第四巻　黒島』の第４章「黒島の暮らし」に反映させるため、竹富町史黒島編専門部会有志がその読み合わせを行ない（2020年）、明らかな誤りを訂正しました。このたび〈増田昭子ノート〉を整えて『竹富町史だより』〈第52号〉の掲載となりましたことを追記します。

屋号について二題

西前津　松　市

1　竹富町屋号の末尾音

『竹富町史第　十二巻　戦争体験記録』で竹富島の屋号を見ると「ヤー（キャー、チャー等含む）」で結んだものがほとんどだ。黒島や旧崎山村も同様。古見に至ってはかつて政治の中心地の一つであったなごりか「ヤー」一色である。先の地域ほどではないが小浜も多い。ヤー（シャー、チャー含む）でなくとも末尾音はア段が圧倒的に多く、そうでないのは177戸「小浜村内」中６戸に過ぎない。「ツァー、カー、サー、ター、ナー、バー、マー、ラ、ワー」等であるが、中には「ヤー」に準ずるものも少なくないのではないか。ちなみに例外６戸の屋号はイシキ（伊敷）、ヤマングスク（山城）等と小浜のそれとは趣を異にするので島外由来のようにうかがえる。

他方、新城島とその兄弟村大原は全戸末尾音はエ段。鳩間、祖納、干立もその割合が高い。鳩間は末尾音が「テ・テー」のケースが100戸中36戸ある。『鳩間方言辞典』に「テー【接尾】～の家」とあり、「ヤー」と同じような働きがあるようだ。波照間では屋号129（基本形）中、末尾音がイ段は30例で、エ段は90例と断然多い。イ段のそれは家の呼称「ヒ」に由来するように思われるが、ここではふれない。

ところで「ヤー」は「ヤ（家）」であるが、エ段の「ツェ、ケ、セ・ゼ、ネ、ベー、メ、レ」等は何を意味するのだろう。鳩間の「テ・テー」のように「家」に由来するのだろうか。波照間出身の仲本信幸は豊年祭の巻踊りジラバ「アガローカラ舟ヌクンチョウ、ベーガーヘーニドンガチ」を「ベーガーは、われわれ、ヘーは家で、ドンガシは来る」と解釈した。『角川古語辞典』に「へ【家・戸】いえ。人家」とある。沖縄、八重山には日本古語と近似する言葉が多数あるのだから、かつて家が「へ」であったと考えてもそれほど無理はないだろう。屋号末尾音がエ段のものの内には「ヘー」から子音ｈが脱落し、残った長母音ｅ：が直前の母音と入れ替わったものもないだろうか。「大泊」は「ブドゥマリ＋ヘー」から「ブドゥマレー」、「稲福」は「イナフク＋へ」から「イナフケー」というように。

本町島々の屋号末尾音はア段とエ段が突出して多いが、「ヤー」「テー」に限らず、ア段かエ段を問わず少なくない末尾音が「いえ・家」に関係してないだろうか。そもそも家名はそのように呼ばれたはずである。

2　旧崎山村屋号の再構成

西表島南西部にあった旧崎山村の鹿川、崎山、網取三集落の屋号は鹿川の２戸を除いて「ヤー（家）」で結ぶ。石垣島や竹富島等と同じ伝だが、西表島は東部の古見を除くと屋号末尾音はエ段であることが多い。新城島、大原（新城島系）は全てがそうだし、崎山村独立以前の親村・旧慶田城村の祖納、干立もその割合が高い。「信仰や村落の行事一切も慶田城村との関連なしに考えることができません（略）神女達が慶田城村に泊りがけで」とあるくらいだから、崎山村の屋号の体裁に若干違和感を覚えてしまう。

祖納の「ムランケ（村中）」に対し鹿川では「ムランケーヤー（村仲）」、祖納の「シンブレ（新盛）」が網取では「シンブレヤー（新盛）」、干立の「タームレー（田盛）」が崎山では「タームリヤー（田盛）」等々。崎山の村建てに波照間島から280人の男女が移住を強いられたが、波照間風屋号を見ると、波照間の「ブタケ（大嵩）」に対し崎山村は「ウタケヤー（大嵩）」、「シキメー（崎山）」は「サキメーヤー（崎山）」、「フタムリ（保田盛）」は「フタムリヤー（蓋盛）」等である。後者はいずれも完結した屋号に「ヤー（家）」をくっ付けた感がある。いわゆる「屋上屋を架す」だ。明治期の崎山村の地図に「大嶺ヤー井」に対し「ウフネヌカー（大嶺ヌ井）」ともある。「アガネーヌカー（赤嶺ヌ井）」、「サキメヌカー（崎山ヌ井）」も「ヤー（家）」抜きだ。元の姿だろう。

末尾音がほぼ「ヤー」一色に成り代わったのはなぜだろう。石垣島から派遣された役人が便宜上四箇風に言い換えたのだろうか。一方崎山村は複数の集落からの寄り合い所帯でスタートした歴史的経緯もあり、比較的役人の意向を受け入れやすかったのだろうか。その点祖納、干立のような一枚岩の古集落は役人が仮に「ヤー」を足して使用したとしても、村人の間にさほど定着しなかったのだろうか。

以前、居酒屋の看板に「バンチャー家（ヤ）」とあるのを、旧家の出の知人が「バンチャー」でわが家だから「ヤ」は余計だと指摘した。今一人の知人はそうなのかと感心しつつも、発音上は違和感ないね、むしろしっくりくるよと笑った。旧崎山村のヤーンナもそういうノリで定着していったのだろうか。崎山村番所「オイサー」は石垣島のオーセと語源を一にすると思われ、それ自体完結しているのだろうが、網取出身者の文章に「オイサーヤ」とあったのも印象的だった。

竹富島のまちなみ　1966年
（撮影・提供　前原基男）

護郷隊について

―竹富島を中心に―

アジア・太平洋戦争末期の沖縄戦に、沖縄島北部や八重山などに配置された秘密部隊があった。その名も「護郷隊」。命名の由来は「郷土の山河を護れ」からくるという。そして彼らの戦略は米軍の背後、寝込みを襲う遊撃戦など、つまりゲリラ戦を展開することだったのである。

1944年（昭和19）10月頃、一人の日本兵が西表島に足を踏み入れた。陸軍中野学校出身の今村武秋少尉である。陸軍中野学校は、遊撃戦（ゲリラ戦）・秘密戦を主に諜報・傍聴という特殊任務を遂行するための養成学校である。離島残置諜者として黒島・波照間島へ潜入した山川敏男（本名／河島登)、山下虎雄（本名／酒井清）らもこの学校の出身者である。

今村は、本島北部に配置された第２護郷隊第４中隊に配属、理由は未詳であるが、その第４中隊を八重山で編成するためにやってきた。

護郷隊は、複数の小隊で構成され、その小隊はさらにいくつかの分隊で成り立っていた。分隊長に在郷軍人らを配置し、一般隊員は、徴兵適齢期以前の地元の青少年たちが臨時召集された。徴兵適齢19歳からは、正規の兵隊にとられたため、軍人不足を補うべく、その下の年代を戦争に送り込んだのである。

阿佐伊孫良さんの協力により、竹富島からは18人が護郷隊として召集されていることがわかった。彼らの生年月日と召集年を加えて作成したのが次の表である。

名　　前	生　年　月　日	召　集　年
有　田　静　一	1929年１月６日	1945年
入仲本　真　次	1914年11月19日	―未確認―
内　盛　　勇	1927年２月15日	1944年
内　間　康　正	1928年９月18日	―未確認―
宇　根　　弘	1871年10月28日	1945年
大　山　　進	1914年９月26日	―未確認―
大　山　　登	1928年８月24日	1944年
大　山　康　雄	1929年１月22日	1945年
亀　井　洋　康	1925年９月23日	―未確認―
亀　　常　好	1927年８月28日	1944年
亀　　照　雄	1928年２月３日	1944年
崎　原　源　一	1928年10月12日	1944年
桃　原　方　信	1928年10月23日	―未確認―
登野原　　勤	1928年２月２日	1945年
武　元　師　一	1927年８月19日	1945年
豊見本　純　一	1928年10月20日	1944年
野　原　啓　助	1928年10月６日	1944年
松　竹　昇　助	1929年５月５日	1945年

ここから徴兵年齢に達していない、当時16、17歳の青少年たちが、戦争に巻き込まれていったことがわかる。このなかに日ごろ親しい内盛勇さんと松竹昇助さんの名前を見つけて驚いた。竹富島の生き字引のような２人には、いろんなお話をうかがったが、護郷隊の話は聞いたことがなかったからだ。

2010年（平成22年）の暮れ、名護市教育委員会の川満彰さん（名護市史編さん係）といっしょに、内盛さんと松竹さんを訪ねた。川満さんは、本島北部の護郷隊の実態を中心に、陸軍中野学校との関連のなかで調査をすすめ、風化していく戦争の記憶を掘り起こしている。そして、川満さんは、「護郷隊だった方たちを訪ね、その体験を丹念に綴ることから、戦時における少年兵たちの実態が浮き上がってくる。さらには大本営が沖縄戦をどう位置づけていたかがうかがえる」という。

内盛さんと松竹さんに簡単な挨拶を済ませた川満さんは、お二人に最初、召集日を尋ねた。松竹さんが召集された昭和20年４月といえば、すでに米軍が沖縄に上陸している時期である。川満さんは「第32軍が壊滅してもそのまま山中にこもり、米兵の背後から遊撃戦を展開し、戦況を攪乱させることこそ、日本軍が護郷隊を編成した目的だった。したがって、米軍上陸後の召集は、まったくおかしくない」と語る。恐ろしいことに、護郷隊は「終わりのない戦争」が第一の任務であったのである。

ところで、交戦時になったら、どうしても山に入らねばならない。松竹さんによると、「訓練は西表島の御座岳、祖納岳、波照間森、ウシク森、テドー山などに兵舎をつくって陣地を張り、各陣地で分散して行われた。山中に弾薬や迫撃砲、そして食糧を持ち込み、爆弾の真管や火薬の結び方、手榴弾の投げ方など、ゲリラ戦を想定しながらの訓練であった」と語る。

内盛さんからは通信隊の話についてうかがった。内盛勇さんは、「最初の隊長は今村武秋中尉だった。その後、大本営から来た横田勲大尉が隊長となった。横田は大本営の陸軍直轄通信部隊として来ていた」と語る。その名のとおり、通信隊は大本営と直結しており、手回しの無線機を用いて、タイムリーな戦況を知ることができた。護郷隊のメンバーはそれをサポートし、２人１組で交代しながら、木と木の間に線を引き、手回し無線機でひたすら電波を起こしたのである。だから、内盛さんは戦争に負けたとき、直接大本営からの連絡が入り、その知らせを聞いたというのである。

一方、松竹さんは、そのときテドー山に上がっていた。一日の任務を終え、睡眠中のところ、夜中に起こされ、「明日の朝、みんなで山を下りる」とだけ告げられたそうだ。翌朝、上原集落に下りてきたとき、日本が戦争に負けたことを、民間人から知らされた。そして、中隊に戻って、銃や日本刀などに入っていた、菊の紋章をヤスリで削って処分したという。

そのほか山中での物資や荷物の運搬は特に厳しかったようだ。また、班長による制裁、空腹の話、敗戦後の経緯など、次々と出てくる護郷隊のエピソードを記録するには、時間がいくらあっても足りなかった。インタビューの最後には、若き日を偲んでか、《沖縄護郷隊隊歌》をうたって聞かせてくれた。

運命かけたる沖縄島に
我等召されて護郷の戦士
奢れる米兵撃ちてし止まん

実は、この歌も陸軍中野学校歌のメロディーにのせた替え歌で、「奢れる米兵撃ちてし止まん」論理に貫かれている。あまりにも咄嗟で、朗々たる歌声に、思わず笑ってしまったが、やがて複雑な思

いに駆られた。

ところで、松竹さんは現在、島の素材を用いて、民具づくりを島人に指導されている。松竹さんの作られた民具は、どれも美しく味わい深いが、「昔は誰でもつくっていたよ」とさりげない。内盛勇さんは生前、民宿「仲盛荘」を営まれ、陽気に民謡をうたって来島者、観光客を喜ばせていらっしゃった。

このようなお二人の島での暮らしから、自然（環境）と暮らしの良いバランスを維持することによって島が守られる側面も見いだせるのではないだろうか。自然や伝統文化に敬意を払い、慎ましく楽しく暮らすことが、結果的に島を守ることに通じるように思われるのである。事々しく「郷土の山河を護」るといわずとも、おのずと島の自然と文化が守られる状況が望ましい。今日、「島を守る」というフレーズをよく聞くが、その意味も改めて問わねばならないだろう。

（飯田泰彦）

協力　　阿佐伊孫良、内盛勇、川満彰、松竹昇助（五十音順）

2022年度　竹富町史編集係　購入資料一覧

No.	タ　イ　ト　ル	編　著　者　名	出　版　社	発行年
1	石干見(いしひみ)―最古の漁法	田和正孝・編	法政大学出版局	2007
2	西表島探検－亜熱帯の森をゆく－	安間繁樹・著	あっぷる出版	2017
3	西表島の自然図鑑	堀井大輝・著	メイツ出版	2020
4	西表の手わざ帖⑴アダン・マーニ	西表島エコツーリズム協会	西表島エコツーリズム協会	2013
5	西表の手わざ帖⑵わら・竹・すすき	西表島エコツーリズム協会	西表島エコツーリズム協会	2014
6	西表の手わざ帖⑶クバ・ピデほか	西表島エコツーリズム協会	西表島エコツーリズム協会	2014
7	沖縄島建築　建物と暮らしの記録と記憶	岡本尚文、普久原朝充	株式会社トゥーヴァージンズ	2019
8	島の手仕事－八重山染織紀行－	安本千夏・著	南山舎	2015
9	しまのともだち―西表島の身近ないきもの図鑑	西表島エコツーリズム協会	西表島エコツーリズム協会	2012
10	戦後沖縄生活史事典　1945－1972	川平成雄・松田賀孝・新木順子・編	吉川弘文館	2022
11	つながる沖縄近現代史	前田勇樹・古波蔵契・秋山道宏・編	ボーダーインク	2021
12	南島探検－西表島の沢を歩きつくす－	安間繁樹・著	あっぷる出版	2020
13	廃村続出の時代を生きる　南の島じまからの視点	安渓遊地・編著	南方新社	2017
14	福木巨木の巡礼誌	東洋企画	東洋企画	2021
15	復帰50年　平良孝七展	沖縄県立博物館・美術館	編集工房　東洋企画	2022
16	平和へのバトン	仲山忠享・著	南山舎	2021
17	八重山・祭りの源流　シチとプール・キツガン	大城公男・著	榕樹書林	2018
18	八重山諸島の水資源	東田　盛善・著	南山舎	2020
19	八重山離島の葬儀（琉球弧叢書・32）	古谷野洋子・著	榕樹書林	2019
20	『琉球文学大系』⑴おもろさうし＜上＞	波照間永吉・校注	ゆまに書房	2022
21	『琉球文学大系』（11）琉歌＜上＞	波照間永吉・平良徹也 照屋理・校注	ゆまに書房	2022
22	『琉球文学大系』（14）組踊＜上＞	大城　學 鈴木耕太 西岡　敏 波照間永吉・校注	ゆまに書房	2022

編　集　後　記

『竹富町史だより』〈第52号〉は、北海道の斜里町と竹富町が、姉妹町の盟約を結んで、今年50年の佳節を迎えたことを記念し、「斜里町との交流史」と銘打って〈特集〉としました。この特集のほか、公民館資料の紹介、研究ノート、現地探訪レポートなどなど、充実した内容で〈第52号〉をお届けします。

特集を組むと、情報が集まるという利点があります。このたびは編集作業を通じて、斜里町のことを知れば知るほど、もっと知りたいという思いにかられました。そして最初に、姉妹町盟約25周年記念事業の一環として、職員交流で斜里町に派遣された政策調整監・宜間正八（1998年当時、経済課技師）を訪ね、「姉妹町職員交流報告」と題した厚いファイルを拝見しました。

「復命書」には、斜里町の自然と充実した職務・交流が豊富な写真とともにさわやかな筆致で報告されており、本号に「このまま載せましょう！」となった次第です。これを読んで斜里町・知床に行きたくなる方も大勢いらっしゃるかと思います。なお、『竹富町史だより』の体裁に整えるにあたり、小見出しを付し写真を厳選・挿入するなど、米盛恭子（町史編集係）が再構成しました。

「斜里町・竹富町親善交流年表」は、町史編集係期待のルーキー・野田有を中心に作成しました。整合性を図るため、当時の新聞記事や諸資料をつき合わせながら作業を進めました。また、斜里町立知床博物館の館長・佐々木剛志氏や学芸員・三枝大悟氏にも貴重な御意見を賜わりましたことを、ここに記して感謝の意を表します。

（飯田泰彦）

2023年８月20日発行

竹富町史だより

第52号

編集発行　竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11－１

TEL　0980－87－6257

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp